



Ｊリーグと世界との差は何か

J.LEAGUE TECHNICAL REPORT

2023 SUMMER

J.LEAGUE TECHNICAL REPORT 2023 SUMMER

Jリーグテクニカルレポートの意義

トップレベルの試合をより意義深いものへ



野々村芳和 チェアマン

今回、Jリーグタイトルパートナーの明治安田生命様をはじめとした皆様の支えもあり、「明治安田 Jリーグワールドチャレンジ powered by docomo」ならびに「Audi Football Summit powered by docomo」を開催することができました。

世界のトップクラブであるマンチェスター・シティやFCバイエルン・ミュンヘンと、Jリーグのトップクラブである横浜F・マリノス、川崎フロンターレがマッチアップする、サッカーファンとしても期待度の高い国際試合となったと思います。

Jリーグでは、このトップレベルの試合をよ

り意義深いものとし、Jリーグや日本サッカー界の発展につなげるために、それぞれの試合を詳細に分析して「Jリーグテクニカルレポート」としてまとめることにしました。制作には、国内外のサッカーに造詣が深いソル・メディア社のfootballista編集部や日々Jリーグのデータ管理を担当しているデータスタジアム社、日本代表の分析チームであるJFAテクニカルハウスにご協力いただいています。

このレポートによって得られた知見がJリーグや日本サッカー界の発展に寄与すること、ひいては次なるJリーグの「作品」を生み出すことを願っています。

明治安田 J.LEAGUE
WORLD
CHALLENGE
2023
powered by docomo

「世界との差」を表す指標とは何なのか？



窪田慎二 執行役員（フットボール担当）

明治安田 Jリーグワールドチャレンジ開催のきっかけになったのは、2015年の川崎フロンターレ対ボルシア・ドルトムントの一戦でした。チーム立ち上げ直後でコンディションが上がっていなかったはずのボルシア・ドルトムントに0-6の大差で敗れた試合だったのですが、のちに川崎フロンターレの強化担当者から「世界基準を知るという意味で、あの試合から大きな刺激を受けた」という主旨のフィードバックをいただきました。川崎フロンターレはその後、2017年に初のJ1リーグ制覇を果たすわけですが、世界と戦うことの重要性を強く感じました。

2017年、2019年に明治安田生命 JリーグワールドチャレンジとしてUEFA欧州選手権やFIFAワールドカップがない2年に1回、海外の一流クラブを招いてJ1リーグ王者、ルヴァンカップ王者と対戦するという形式で開催いたしました。コロナ禍の影響で2021年は見送らざるを得ませんでしたが、約1年かけて準備を進め2023年から大会を復活させることができました。

「世界との差を可視化する」というのは、Jリーグフットボール本部の大きなテーマでもあります。イングランドのプレミアリーグ、スペインのラ・リーガ、ドイツのブンデスリーガ、イタリアのセリエAなど欧州のトップリーグで活躍する日本人選手が増えてきました。しかし、彼らは「欧州サッカーとJリーグは別物」と言います。そうだとしたら、いったい何が違うのか？ リーグとしてどんなデータを取って、ど

の指標を追っていくべきなのか？ フットボール本部では、そうした議論をここ数年続けています。

難しいのは、リーグごとのデータを集めることは可能ですが、環境面などの違いがありますし、データ会社によって各指標の定義も違ってきます。そこで両者が同じピッチに立つJリーグワールドチャレンジで「世界との差を可視化する」ことにチャレンジしてみることにしました。

同時に、JリーグはJFAと合同でアナリスト勉強会を行うなど「分析」という分野にも注目しています。海外では「分析→コーチ→監督」という新しいパスウェイで一流監督が誕生したり、アナリストという職業自体が試合で勝つために必要不可欠なものとして認識されています。そうした新しい人材の発掘にも力を入れていきたいと考えており、今回のレポートの分析にも筑波大学蹴球部と東京大学ア式蹴球部に協力してもらったことになりました。

まだ道半ばですが、今後Jリーグでは注目すべきスタッツを可視化して試合を見ていただくことも検討しています。そこで取り上げるべき指標は何が適切なのか。今回のレポートも参考にして議論を進めていきます。何らかの指標を決めておしまいではなく、変化する世界のサッカーに合わせて日々アップデートしていく必要もあるでしょう。多くのサッカーファミリーの意見も聞きながら、日本サッカー、Jリーグの発展に取り組んでいきたいと考えております。

CONTENTS

- 02 Jリーグテクニカルレポートの意義
- 06 [特集]
Jリーグと世界との差は何か
- 08 **YOKOHAMA F.MARINOS 3-5 MANCHESTER CITY**
横浜F・マリノス対マンチェスター・シティ 試合情報
- 10 **PHYSICAL ANALYSIS**
フィジカルデータ総数に大きな差はない
違いとなる動きの「質」を考察する
- 13 **COMMENT of YOKOHAMA F.MARINOS #1**
喜田 拓也／渡辺 皓太／山根 陸
- 14 **TACTICAL ANALYSIS**
ハイプレスを実現する戦術的ディテール
「勝負所でのギアアップ」という別レイヤーの課題
- 15 **COMMENT of YOKOHAMA F.MARINOS #2**
島中 楨之輔／上島 拓巳／一森 純
- 18 CFG担当者がマンチェスター・シティ戦で見た
横浜F・マリノスの現在地
- 22 **KAWASAKI FRONTALE 0-1 FC BAYERN MUNICH**
川崎フロンターレ対FCバイエルン・ミュンヘン 試合情報
- 24 **PHYSICAL ANALYSIS**
真の意味での「強度」とは？
課題は「運用」と「連続性」の向上
- 27 **COMMENT of KAWASAKI FRONTALE #1**
小林 悠／宮代 大聖／山田 新
- 28 **TACTICAL ANALYSIS**
求められるのは、全局面の適応力
課題は「保持時の支配力」と「非保持時のブロック守備」
- 31 **COMMENT of KAWASAKI FRONTALE #2**
橘田 健人／登里 享平／大南 拓磨
- 32 **SCIENCE BEHIND KICK** キックを科学する
なぜロドリはインサイドキックで、ミドルシュートを決められるのか？
- 34 **FC BAYERN MUNICH 1-2 MANCHESTER CITY**
FCバイエルン・ミュンヘン対マンチェスター・シティ 試合情報
- 36 **DETAILED MATCH STATS**
- 38 [総括コラム]
データから何が語りうるか何が語りえぬか、
そして何を語るべきか
- 42 JFAテクニカルハウス座談会
「世界との差」は可視化できるのか？
- 48 **J.LEAGUE TECHNICAL REPORT 2023 SUMMER**から見えた
「世界との差」10の視点



J.LEAGUE TECHNICAL REPORT 2023 SUMMER

発行日 2023年9月26日 初版発行
発行所 公益社団法人 日本プロサッカーリーグ (Jリーグ)
〒100-0005 東京都千代田区丸の内2-1-1 明治安田生命ビル8F
<https://www.jleague.jp>

写真 J.LEAGUE

制作・編集・デザイン 株式会社ソル・メディア (footballista 編集部)
データ監修 データスタジアム株式会社

協力 浦和レッドダイヤモンズ
川崎フロンターレ
横浜F・マリノス
JFAテクニカルハウス
筑波大学蹴球部
東京大学ア式蹴球部

本書の無断複写複製(コピー)は、特定の場合を除き、著作権の侵害となります。

特集

Jリーグと世界との差は何か

「世界との差」というテーマで、近年フォーカスされてきたのは

「インテンシティ」と呼ばれるプレー強度の違いだろう。

プレッシングの際のボールを奪う意識、奪われた後の切り替えの速さ、

スプリントを連続できる持続力……。

戦術面に関しては、相手の出方に合わせたビルドアップの駆け引きなど、

試合展開に応じて柔軟に戦い方を変えられる「対応力」がクローズアップされてきた。

パススピードの速さ、シュートのレンジや強さなどの技術面の違いも、

ずいぶん昔からよく指摘されてきたテーマだ。

しかし、こうした「通説」は客観的に可視化できる指標がなければ証明できないし、

「差」が開いたのか、縮まったのかも観測できない。

30周年を迎えたJリーグの現在地はどこにあるのか？

そこで世界のトップクラブとJリーグのクラブが直接戦う

明治安田Jリーグワールドチャレンジを題材に、

筑波大学蹴球部と東京大学ア式蹴球部のアナリストたちに

フィジカルデータと戦術データの両面から各試合を分析してもらった。

人間の目で見ただ定的な分析と定量的なデータを結び付ける形で、

「世界との差」の正体に迫ってみたい。

明治安田Jリーグワールドチャレンジ2023

powered by docomo

2023.7.23 19:00 国立競技場

横浜F・マリノス **3** **5** マンチェスター・シティ

27' アンデルソン ロベス 37' 松原健	2-2	40' ジョン ストーンズ 43' フリアン アルバレス
86' 井上健太	1-3	52' アーリング ハーランド 72' ロドリ 90'+2 アーリング ハーランド

気温	28.9℃	湿度	63%	天気	晴、弱風	観客数	61,618人
----	-------	----	-----	----	------	-----	---------



横浜F・マリノス 4-2-1-3

Coach: ケヴィン マスカット

Pos.	No.	InOut	Name
GK	1		一森 純
DF	2		永戸 勝也
DF	4		畠中 禎之輔
DF	5	▼73'	エドゥアルド
DF	27		松原 健
MF	6	▼73'	渡辺 皓太
MF	8		喜田 拓也
MF	10	▼46'	マルコス ジュニオール
FW	7	▼73'	エウベル
FW	11	▼73'	アンデルソン ロベス
FW	18	▼73'	水沼 宏太
Sub.			
GK	21		飯倉 大樹
GK	31		白坂 楓馬
DF	15	△73'	上島 拓巳
DF	19		實藤 友紀
MF	25		吉尾 海夏
MF	28	△73'	山根 陸
MF	34		木村 卓斗
MF	35	△46'	榊原 慧悟
FW	14		植中 朝日
FW	17	△73'	井上 健太
FW	20	△73'	ヤン マテウス
FW	23	△73'	宮市 亮
FW	36		村上 悠輔
FW	41		杉本 健勇

マンチェスター・シティ 4-1-2-3

Coach: ペップ グアルディオラ

Pos.	No.	InOut	Name
GK	18		オルテガ モレノ
DF	2	▼46'	カイル ウォーカー
DF	5	▼46'	ジョン ストーンズ
DF	6	▼46'	ナタン アケ
DF	25	▼46'	マヌエル アカンジ
MF	4	▼46'	カルビン フィリップス
MF	8	▼46'	マテオ コバチッチ
MF	10	▼46'	ジャック グリーリッシュ
MF	80	▼46'	コール バルマー
MF	87	▼46'	ジェームズ マカティー
FW	19	▼46'	フリアン アルバレス
Sub.			
GK	31		エデルソン
GK	33		スコット カーソン
DF	14	△46'	アイメリック ラポルテ
DF	21	△46'	セルヒオ ゴメス
DF	3	△46'	ルーベン ディアス
DF	7	△46'	ジョアン カンセロ
DF	82	△46'	リコ ルイス
MF	16	△46'	ロドリ
MF	17		ケビン デ ブライネ
MF	20	△46'▼75'	ベルナルド シウバ
MF	32	△75'	マキシモ ペッロネ
MF	47	△46'	フィル フォーデン
MF	52	△46'	オスカー ボブ
FW	9	△46'	アーリング ハーランド

横浜F・マリノス	マンチェスター・シティ	横浜F・マリノス	マンチェスター・シティ
34.0%	ボール保持率 (%)	66.0%	14 (7)
9 (5)	シュート (枠内)	20 (9)	11
415 (81.4%)	パス (成功率)	779 (91.0%)	119.6
412	バイパス**	882	128
25	30mライン進入	70	44
6	PA内進入	25	68:40
			APT***
			68:40
			タックル (成功)
			19 (14)
			クリア
			11
			総走行距離 (km)
			117.0
			スプリント
			143
			裏抜け
			82

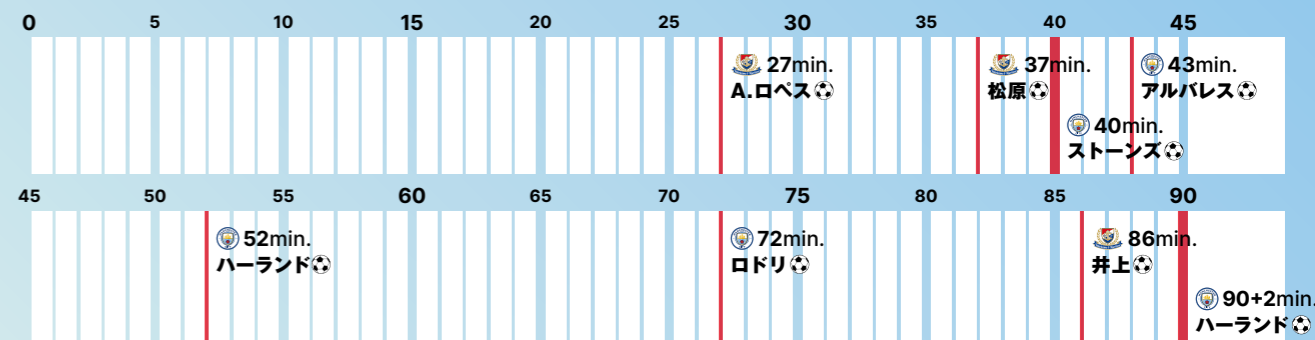
**パス、バイパス、30mライン進入、PA内進入はセットプレー除く
***パスで相手選手を飛ばした数 ***アクチュアルプレーイングタイム

YOKOHAMA F.MARINOS

3-5

MANCHESTER CITY

TIMELINE



EVENTS



27min. A.ロベスが 撃ち合いの口火を切る

先制したのは横浜FM。自陣からのビルドアップで敵陣深くまで侵入すると、A.ロベスが対峙するアカンジの隙を突いて右足を振り抜く。一度はGKに防がれるも、素早くこぼれ球を回収し2度目のシュートでゴールネットを揺らした



52min. ハーランドが 規格外の能力を証明

後半からの登場となったハーランドだが、出場からわずか7分で得点を記録。フォーデンからのパスを受けると、エドゥアルドに寄せられながらも左足を振り抜き、ゴール右隅に正確なシュートを決めた



72min. ロドリ得意の ミドルシュートが炸裂

シティの4点目はロドリのミドルシュート。横浜FMの注意を左サイドに集めてはっきりと空いたバイタルエリアをドリブルで前進し、狙いすましたコントロールショットでゴール右隅を破った

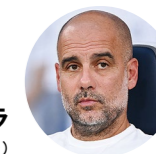
COMMENT of YOKOHAMA F.MARINOS



ケビン マスカット (横浜F・マリノス監督)

タ フな試合になりましたが、選手たちが本当に素晴らしいプレーをしてくれたことを誇りに思っています。人生は選択の連続です。簡単な道を進むのは楽ですが、私たちはセーフティな選択に逃げることなく、勇気を持って自分たちのスタイルとアイデンティティをピッチ上で表現しました。前から良いプレスをかけつつ、逆に私たちは相手の激しいプレスを剥がしてチャンスを生み出すことができました。相手がマンチェスター・シティであろうと、リスペクトしながら私たちはあらゆる局面で自分たちのサッカーを貫いていく。その結果として生まれた得点と失点を含めて、いろいろな学びがあったので今後の成長材料にしていければと考えています。

COMMENT of MANCHESTER CITY



ペップ グアルディオラ (マンチェスター・シティ監督)

非常に良いテストになりましたね。もちろん私たちの準備期間が短かったのも一因ですが、横浜F・マリノスはシーズン中でコンディションも良く、攻守の切り替えが素晴らしかった。リードを許した時間帯があったように、難しい試合展開を強いてきて苦戦しました。今季のJ1リーグでも優勝できるでしょう。Jリーグを評価していない人がいるとすれば、それは無知をさらしているだけです。クオリティもレベルも高い。4年前からの変化を挙げても、今日の試合ではストライカーとウイングがとても速かった。カイル(ウォーカー)を抜いた選手(エウベル)もいたくらいです。(Jリーグでは)三苫薫選手のような素晴らしいプレーヤーを輩出しているのもうなずけます。

フィジカルデータ総数に大きな差はない 違いとなる動きの「質」を考察する

文 松野稜河 (筑波大学蹴球部)
データ監修 データスタジアム

【総論】

フィジカルな側面から世界と日本の差を見た時、走行距離、スプリント距離 (25km/h以上の走行距離)、ハイスピード距離 (20km/h以上25km/h未満での走行距離) などで大きな差が開いているわけではない (詳細は36ページ参照)。加速・急加速の回数についても同様であった。つまり身体的な能力差を過度にクローズアップするのは正しくないと言えるのかもしれない。

横浜F・マリノスの得点シーンを見ると、縦へのスピードは世界のトップクラブであるマンチェスター・シティにも劣らず、相手最終ラインに対してのハイプレスも一定の効果を発揮していた。違いになっているのは、持っているものを「どのように」「どのタイミングで」発揮していくかという「質」の部分だろう。

その差を生み出しているのは、チームとしてのプレーイメージの共有・実行力、選択肢を複数持った中でよりゴールを目指すプレーを可

能にする技術力などが考えられるが、日本人選手が個人では欧州5大リーグで活躍している状況を鑑みると、チーム戦術の成熟度、試合でのインテンシティなどの日常となるプレー環境そのものに差があるのかもしれない。

27.1km vs 39.2km

ボール保持時走行距離 (7km/h以上)

同型ながら、
小さくない差を生む2つの理由

この試合の具体的な分析を進める前に、前提条件を共有したい。マンチェスター・シティと横浜FMの試合は押し込み奪われても素早いリゲイン (ボール再奪取) でポゼッションを握るシティと、カウ

ンターに転じる、もしくは得点シーンのような縦に速い攻撃を仕掛ける横浜FMという構図であった。

シティのボール保持率が66.0%に対して、横浜FMは34.0%。相手陣内の保持時間に関してシティは1183秒 (全体のアクチュアルプレーイングタイムの28.7%)、横浜FM388秒 (同9.4%) であった。比較対象として、横浜FMのJ1リーグ2~7月での平均値はボール保持率54.8%、相手陣内保持秒数706秒 (同21.2%) であることから、横浜FMのこの試合でのデータとJ1リーグ平均との比較もその前提で行う必要がある。同時に、シティのボール保持率が70%を超えることが珍しくないことを考えれば、この数字は横浜FMが自陣に引きこもって守りを固めたのではなく、敵陣ではマンツーマンのハイプレスをを行い、自陣からもショートパスで丁寧なビルドアップを行うという勇敢な戦いを志向したことも示している。

もう1つ特記すべきは、横浜FMはシーズン中、シティはプレシーズン開始直後で両チームの間にはコンディション面で差があったことも見逃せない。交代枠の関係 (特にシティの選手はほとんどが45分間のプレーだった) で、シーズン中の数字とそのまま比較はできないことも併せて抑えておきたい。

その上で注目したいのが、図1の両チームのボール保持時走行距離 (7km/h以上) だ。シティの39.2kmという値は横浜FMの27.1kmを圧倒しており、今季J1リーグでの横浜FMの7月3試合での平均値32.3kmと比較しても、大きく上回っている。

これには2つの理由が考えられる。

1つは保持時のアクションの多さだ。その代表例が「裏抜け」の回数で、それについては後述するが、ボール保持者以外のオフ・ザ・ボールの動きによってマンツーマン気味に守る横浜FM守備陣のマークのずれを生み出していた。72分のシティの4点目となったロドリのミドルシュート時に横浜FMのバイタルエリアが大きく空いてしまったのは、ボール周辺に位置したシティの選手たちの動きの運動の成果と言える。

もう1つは、ボール保持時にネガティブトランジション (攻→守の切り替え) に備えたポジションバランスの再構築を行っているからであり、それについても後述したい。

21

ハーランドの裏抜け数

特にPA内への
オフ・ザ・ボールの動きに注目

保持時のアクションで顕著な差が見られたのは「裏抜け」 (定義は「自身がボールキープしていない状況で相手DFラインを突破した瞬間が存在する14km/h以上のラン」) だった。シティの裏抜け数は82回で、44回の横浜FMと2倍近い差が開いている。横浜FMのJ1リーグ2~7月平均の53回と比較しても明らかに多い (図2参照)。

選手別で見ると、センターフォワードとして出場したハーランドの21回は特筆に値する数字だ。ちなみに、2023シーズンのJ1リーグ2~7月における1試合あたりの個人トップは29回なので、90分換算すると42回となるハーランドの数字がいかに突出しているかが理解できる。

その他の攻撃陣もインサイドハーフのB.シウバ11回、ウイングのS.ゴメス8回、インサイドハーフのフォーデン7回、同じくインサイドハーフのマカティエ6回、先発したセンターフォワードのアルバレス6回と、いずれの選手も相手最終ラインに対してかなりの数のアクションをしていることがわかる (表3参照)。

裏抜け先エリアを見ても、図4の通りシティは全82回中45回、全

図1 ボール保持時走行距離 (km) (7km/h以上)



図2 裏抜け数

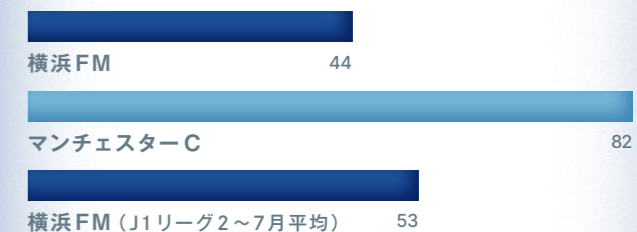
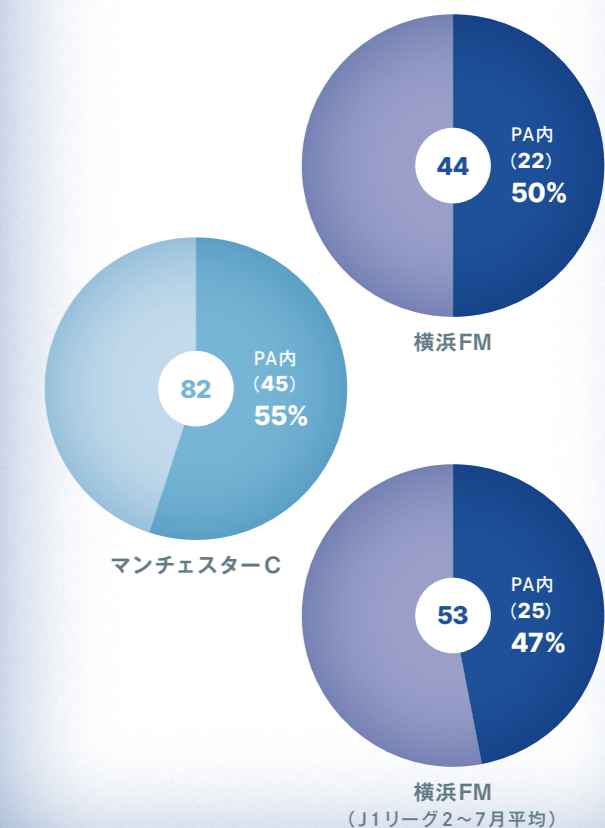


表3 両チームの裏抜け数トップ5

横浜FM	出場(分)	マンチェスターC	出場(分)
1 エウベル/WG	73 7	1 ハーランド/CF	45 21
1 A.ロベス/CF	73 7	2 B.シウバ/IH	30 11
1 永戸勝也/SB	90 7	3 S.ゴメス/WG	45 8
4 水沼宏太/WG	73 6	4 フォーデン/IH	45 7
5 宮市亮/WG	17 5	5 マカティエ/IH	45 6
5 M.ジュニオール/OMF	45 5	5 アルバレス/CF	45 6

図4 裏抜け先エリアにおけるPA内の割合



PHYSICAL ANALYSIS

YOKOHAMA F.MARINOS VS MANCHESTER CITY



体の55%がペナルティエリア（PA）内が裏抜け先となっており、PA内へのアクションが多い。横浜FMは全44回中22回で50%、J1リーグ2～7月平均でも全53回中25回で47%にとどまっており、PA内へのアクションの量自体もやや劣ることが読み取れる。

PA付近でボールホルダーを追い越し、最終ラインに対してアクションを続ける——シティの選手たちが示しているPA内への裏抜けなどのオフENSIBアクションは、世界を目指す上で重要な指標の1つになり得ると考える。

1 vs 7 アタッキングサードでの ロスト後5秒未満リゲイン数

保持時のポジションバランスに
違いがある

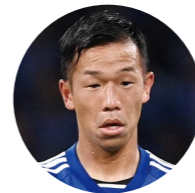
もう1つ大きな差になっていたのは、図5のアタッキングサードでのロスト後5秒未満のリゲイン（ボール再奪取）数である。

シティの総数33回のうち5秒未満のリゲイン数は11回。アタッキングサードに限定すると20回のうち7回が5秒未満であった。逆に横浜FMは総リゲイン数30回中5秒未満リゲインは6回、アタッキングサードでは総数9回のうち5秒未満リゲインは1回のみだった。J1リーグ2～7月での横浜FMの1試合平均と比較すると、リゲイン33.8回、5秒未満リゲインは11.4回とシティに匹敵する数字を叩き出しているが、アタッキングサードに限定するとリゲイン12.1回、5秒未満リゲイン4.5と数字が落ち、完全に相手を押込んだ状態でボールロストした後の囲い込みに課題があることがうかがえる。

その理由として考えられるのが、保持時走行距離の多さの理由としても言及した保持時のポジションバランスの再構築である。シティの各選手が保持時からネガティブトランジションに備えたポジションも同時に取り続ける（例えば自分のマーク相手を捕まえておく予防的マーキング、危険なスペースをケアする予防的カバーリングを行い続けるなど）ことで、奪われた後の5秒以内での即時奪還に繋がっていると思われる。

ボール保持時のオフ・ザ・ボールの動きの質は、崩しの局面においても、ネガティブトランジションにおいてもカギを握る部分であり、世界のトップクラブから学べることもありそうだ。

図5 ロスト後5秒未満リゲイン数



MF8 Takuya Kida

喜田 拓也

1994.8.23 (29歳)
170cm / 64kg



“ビルドアップが一枚上手。パズルのように1つずつズラされて…”

チームでも真つ向勝負するという話をしている、プレスもできるだけ前からこうと試合に入りましたが、シティのビルドアップの配置、構造が一枚上手でした。やっぱり3人目、4人目まで同じ絵を描けて繋がっている。縦にボールが入ったら絶対に1人はサポートにつく、横につくという基本を全員がちやんとやるので、逃げ道も次のルートも簡単に作られて後手に回らされる。あとはパズルのように1つずつズラされて、個々にクオリティを出されてしまいました。そうやって前半から走らされて疲弊していたところで、後半は総入れ替えされたんです

ど、やっぱり一人ひとりが同じ絵を持って試合を進めてくる。そこで押し込まれる時間帯が多くなった結果、4年前よりも支配されてしまいました。特に5失点目はボール1個分ズレていたら通らないところにボールを入れてきて、フィニッシュのクオリティにも高さを感じています。ただ、僕らが決して恐れることなく戦った結果も、ちゃんと数字に出ていると思います。ボールを引っかけてチャンスを作れるシーンもあったので、その質と回数を上げていきたい。この感覚や基準を忘れないで、チームのレベルアップに繋げていきたいです。

COMMENT of

“要所要所での中盤の選手、DFの選手の運ぶドリブルが嫌だった”

シティの選手はパスが上手いイメージが強いかもしれませんが、僕は要所要所での中盤の選手、DFの選手の運ぶドリブルが嫌でした。例えばストーンズ選手がボランチの位置に入ることはわかっていたんですけど、ドリブルでもう1つ前に出てくるとは想像していません。あのようにDFラインから上がってくると、前線の選手は後ろまでついていけないので数的不利に陥ってしまう。それでマークがズレたところで的確にパスを出してくるので「どうすればいいんだ」と。パスでテンポを作るチームが多いJリーグでそう感じることは少ないです。

それで守備に走らされて体力が失われていくので、ボールを奪っても自分たちの攻撃ができない。シティはマンツーマンなのでGKまでプレスに来た時に、そこから1つずつズラしていく狙いで、立ち上がりはそれで剥がせていたんですが、すぐに相手も中間のポジションを取ってきて埋められてしまった。Jリーグだったら自分を經由してプレスから逃げられますけど、ボールに触れないくらいタイトについてくるシティには通じませんでした。そこをシティの選手のように運んで1枚剥がせることで、リズムを変えるようなプレーをしていきたいです。



MF6 Kota Watanabe

渡辺 皓太

1998.10.18 (24歳)
165cm / 66kg



YOKOHAMA F. MARINOS #1



MF28 Riku Yamane

山根 陸

2003.8.17 (20歳)
173cm / 65kg



“ターンできたように前を向くところは通用したけど本来の強度なら…”

まずシティの選手は自分のポジションを守ってあんまり動き過ぎなかったです。受け手は待っていればボールが来るイメージで、1m、2m、半歩、一歩でタイミング、ポジションを調整していく。そこに出し手も速いボールをつけていたので、自分たちがプレスに行くタイミングを作らせてもらえませんでした。エネルギーを使って取りに行った時にはボールを下げてやり直されて、外に逃げずに中で繋ごうとしていたので、非常に対応が難しかったです。あとは普段からシティの試合はよく見ているんですが、ピッチ上では映像で見る以上のスピード

感がありました。パスをして前に出ていくとか、ファーストタッチで相手の前に出ていくような一瞬の体、テンポのスピード感はJリーグと違いましたね。3mを寄せるとかの守備のスピード感にも違いはあったのですが、技術的にはベッローネ選手とハーランド選手に囲まれてターンできたシーンのように、前を向くところは通用したと思います。でもシティはプレシーズン中だったので本来の強度だったらどうなるかわかりません。そのような上の世界に行けるようにしたいので、もっといろんな相手と対戦して経験を積んでいきたいです。

TACTICAL ANALYSIS

YOKOHAMA F. MARINOS VS MANCHESTER CITY

ハイプレスを実現する 戦術的ディテール 「勝負所でのギアアップ」 という別レイヤーの課題

文 宮崎幹仁、永井健太郎（筑波大学蹴球部）
データ監修 データスタジアム

[攻撃]

412 vs 882

バイパス数（セットプレー除く）

「飛ばすパス」に大きな差。

ポジション別比較で顕著だったCBの値

横浜F・マリノスとマンチェスター・シティは後方からのショートパスを中心としたビルドアップと前線でのハイプレスを組み合わせたボール支配をコンセプトに置いている同型のチームだが、攻撃スタツ

ツで顕著な違いが見られたのはバイパス数である。定義としては「パス時の前方相手人数ーパス受け時の前方相手人数」で、いわゆる1本のパスで何人の相手選手を「飛ばす」ことができたかがわかる指標だ。成功かつプレー継続した前方180度へのパスのみが計算対象となる。

図1の通り、この試合での横浜FMのセットプレーを除くバイパス数は412。それに対してシティは882と倍以上の値を記録している。詳細を読み解くために個人別のバイパス数（表2参照）を見ていくと、特に目立っているのがシティの左CBラポルテの117という数字だ。バイパスは飛ばした相手選手の合計値を計測する指標なので必然的に後方の選手が多くなる傾向があるとはいえ、45分間の出場のみで

（プレー時間の多い）横浜FMのCB陣の2倍近い数字を叩き出しているのは無視できないポイントだ。

同じく後半から出場したCBのルーベン・ディアスも69回と高い数字を残していることから、ビルドアップの局面でシティのCBの「飛ばすパス」が大きな役割を果たしているのは確かだ。特に左利きの左CBであるラポルテは、右のタッチライン際で張っている右ウイングへの対角線パスを得意としており、右のインサイドハーフが相手の左SBを釣り出すことができれば、高い確率でフリーになった右ウイングにパスを通すことができる。この日の出場はなかったが、GKエデルソンも同じことが可能だ。

現代サッカーではこの試合の両チームがそうだったように前線からハイプレスをかけていく守備がスタンダードになっており、その中で組織的に寄せて来る相手のFWライン、さらにはMFラインの裏に一発でロングレンジのパスを刺せる能力は、これからのCB（やGK）に必須になっていくのかもしれない。

[ポジティブトランジション] 19.6% vs 10.0%

ゲイン後5秒未満ロスト率

「ハイプレス→即時奪還」
が構造的に抱えるリスク

ポジティブトランジション（守→攻の切り替え）でまず注目したのは、図3のゲイン後シュート率だ。両チームともにゲイン（ボール奪取）数は56対60とほぼ変わっていないが、そこからシュートに至った割合を比べると、横浜FMの12.5%に対してシティは21.7%と大きく上回っている（5回に1回以上はシュートに達しているという計算だ）。ちなみに、横浜FMのJ1リーグ2～7月の平均は9.6%であり、この試合だけが特別低いわけではない（むしろ数値は上がっている）。

次に、図4のゲイン後シュートの経過時間別割合を見ていくことにする。ここから読み解ける明らかな傾向は、シティのゲイン後シュートの約70%がボール奪取から20秒以上経過した後のシュートで、それに対して横浜FMは5秒未満が42.9%と最も大きな割合を占めている。横浜FMのJ1リーグ2～7月の平均を見ると、ここまで極端な傾向は出ていないので、ポジティブトランジションにおける極端な意志向の強さは、シティ戦に限定したゲームプランだったのかもしれない。とはいえ、前述のJ1リーグ平均でも20秒以上の割合は30%程度で、シティに比べると縦に速いサッカーを志向していると言える。

ゲイン後ロストの時間も比較してみたい。ゲインの後にシュートに至らなかった場合は、当然その途中でボールを失っているわけだが、果たして何秒で失っているのだろうか？ここではボールロスト直後、5秒未満の数字にフォーカスを当ててみた（図5参照）。横浜FMの5秒未満ロスト率は19.6%、約5回に1回は5秒以内にボールを失っていることになる。対するシティは10%、10回に1回である。

守備時は5レーン埋める5バックで守るチームが増え、ブロックを完全に整えられた状態で攻略するのは年々難易度が上がっている。そのため、ポジティブトランジションでは相手のブロックができる前に攻め切ってしまう縦に速い攻撃が推奨されており、近年のシティもその流れに乗っているとされている。しかし、ゲイン後のカオスな状況で攻めようとするれば当然再ロストのリスクは高くなる。シティのゲイン後シュート率の約70%は20秒以上で、5秒未満ロスト率が横浜FMより10%近く低いという事実は——特に敵陣でのボール支配とハイプレスをコンセプトにするチームにとって——ポジティブトランジション時の振る舞いの1つのヒントになるかもしれない。

図1 バイパス数（セットプレー除く）

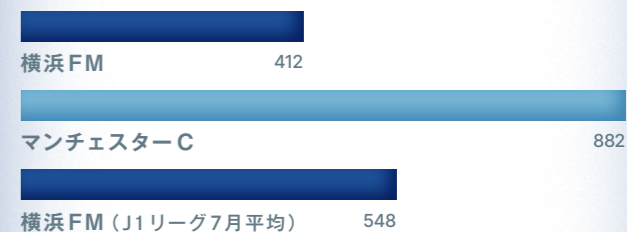


表2 両チームのバイパス数（セットプレー除く）トップ5

横浜FM		マンチェスターC	
順位	選手	出場(分)	パス数
1	畠中楨之輔/CB	90	67
2	松原健/SB	90	55
3	一森純/GK	90	52
4	永戸勝也/SB	90	48
5	エドゥアルド/CB	73	44
1	ラポルテ/CB	45	117
2	モレノ/GK	90	76
3	R.ディアス/CB	45	69
4	カンセロ/SB	45	66
4	フォードン/IH	45	66

図3 ゲイン後シュート率

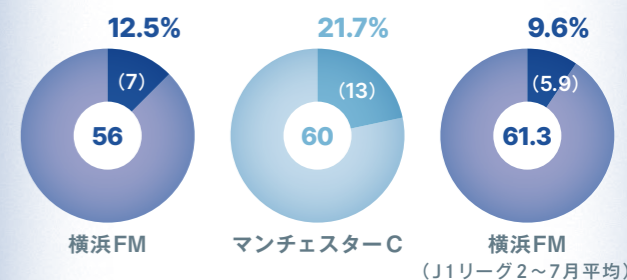


図4 ゲイン後シュート率の経過時間別割合

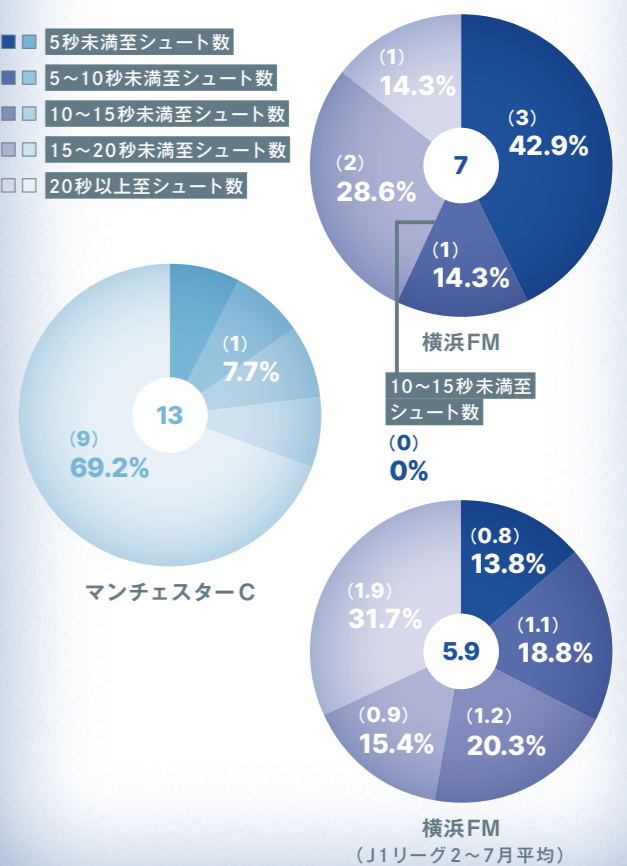


図5 ゲイン後5秒未満ロスト率

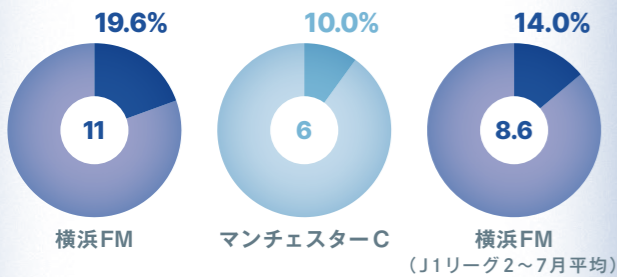
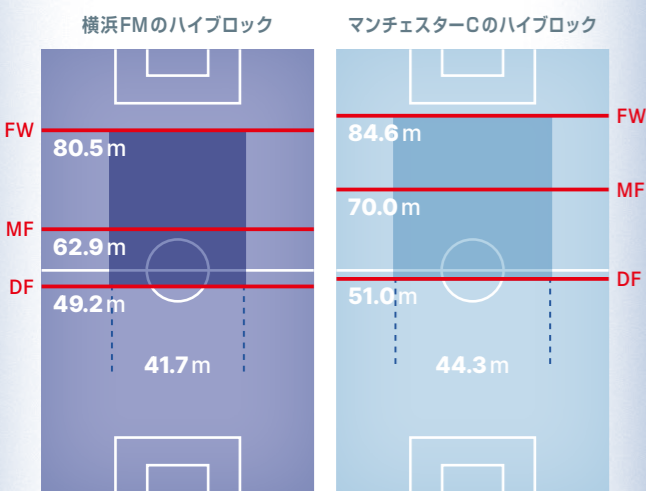


図6 ブロック守備の高さと幅



	横浜FM	マンチェスターC	
ミドルブロック	FWライン	63.1m	64.4m
	MFライン	48.9m	51.6m
	DFライン	39.4m	39.2m
ローブロック	幅	41.0m	42.3m
	FWライン	49.0m	47.7m
	MFライン	35.7m	36.2m
	DFライン	27.2m	27.2m
	幅	39.4m	38.6m

表7 時間帯別のパスを受けた時の相手選手距離 (m)

時間帯 (分)	横浜FMのディフェンシブサード	マンチェスターCのアタッキングサード
0-15	9	5.1
15-30	7.8	5.5
30-45	8.3	5.4
45-60	6	6.1
60-75	7.6	5.6
75-90	8.8	5.7
平均	8.0	5.6

[守備]

62.9m vs 70.0m

ハイブロック守備時のMFラインの高さ

なぜ、シティのMFラインはここまで高いのか？

守備の局面で興味深い傾向が出たのは、ブロック守備の高さと幅だ。図6のようにローブロック、ミドルブロックでは大きな差はなかったが、ハイブロック時に明らかな違いが見られた。

FWラインの高さが4.1m、MFラインに至っては7.1mもシティが高い位置を取っている。特に注目すべきはMFラインの高さで、図6を見てもわかるようにDFラインよりもFWラインに近い位置まで押し上げていることがわかる。J1リーグ2~7月平均を見てもハイブロック守備時の3ライン配置でこのようなバランスになっているチームはほぼなく、横浜FMの図のようにMFラインとDFラインが接近するのが通常のポジションバランスだ。

ハイプレスを外されるのはリスクが高く、プレスの第二陣となるMFラインの選手たちは行く選手とリスクケアする選手に分かれることになるが、シティのMF陣はマンツーマンプレスで前からハメに行くことで、このような極端なポジションバランスになっていると思われる。パスコースを切りながら寄せ、パスが出ない選手は大胆に捨てるなどのプレス時の個々の判断、さらには万が一、プレスをかわされても対人で対処できるDFラインの個人能力への信頼が、MFラインの積極性の根拠になっているのだろう。

いずれにしても、ハイブロック守備の高さと幅はハイプレスの特徴を測る1つの指標になると感じた。

[まとめ]

ここまでバイパス数からCB (やGK) のロングフィードの重要性、ゲイン後5秒未満ロスト率からポジティブトランジション時のリスクコントロール、ハイブロック守備時のMFラインの高さからハイプレスを機能させる指標について考察してきた。最後に取り上げたいのは、そうした戦術のディテールとはレイヤーの違う、ゲーム中の駆け引きについてである。

表7は、シティの高い位置でのプレスと横浜FMのプレス回避を見るために、15分ごとの時間帯別にパスを受けた時の相手選手距離 (横浜FMのディフェンシブサード=シティのアタッキングサードに限定) を算出したものだ。

横浜FMのディフェンシブサードでの相手選手との距離は最初の15分間は9m、以降も7.8m、8.3mと前半45分に関してはシティの高い位置からのプレスはやや甘かったことが読み取れる。ところが、後半開始からギアを上げると一気に6mにまで接近。この間にハーランドのゴールで勝ち越しに成功し、以降は再びプレッシャーを緩めている。一方、シティのアタッキングサードでの相手選手との距離は開始からほぼ一定で、だいたい5m台で推移していたが、シティが最もプレッシャーを強めた45-60分の時間帯に横浜FMのプレッシャーが最も緩んでおり、6.1mまで距離が開いている。おそらく横浜FMは自陣での守備では5m台でプレッシャーをかけることがこの試合の平均的な振る舞いで、相手が突如ギアを上げてきたことでそれが崩れてしまったと見る事ができる。

ハイインテンシティが求められる現代サッカーで「常に100%」でプレーするのは難しい。様子を見ながら勝負所でギアアップする個人の判断、そしてその意思を統一するチームとしての共通理解は、さらに上を目指すならば磨かなければならない要素と言える。



DF4

Shinnosuke Hatanaka

島中 慎之輔

1995.8.25 (28歳)
185cm / 83kg



“先制点は普段から僕らがやっている
F・マリノスらしいゴール”

試 合の入りでキックオフの流れからグリーンリッシュ選手に飛び出されたシーンはマークの受け渡しができなかったのですが、段々とラインコントロールや、出し手の制限をできるように、自分たちがボールを奪ってショートカウンターを仕掛けられる場面を生み出しました。シティも前からプレスをかけてきて、Jリーグと比べてスピードはありましたが、しっかりと見て判断をすれば対応ができる。先制点は普段から僕らがやっている形で、FWにボールを当てて3人目が絡んで縦に突破するF・マリノスらしいゴールが奪えたと思います。

後半はシティが選手を入れ替えてきて、ハーランド選手については日本では体験したことのない加速力、体の強さがありました。ゴールを狙えるポジショニングとシュートコースの作り方も上手かったです。彼の裏抜けも使いながら嫌なところにパスを入れてくるのでボールを奪い切ったのですが、外に逃げられたり、内に逃げられたりと思うように追い込めなかった。だから相手にやられないことを優先してポジショニングを考え続けていました。シティは、ボールの置きどころやボールを回す位置を常に変える状況判断が上手く、後半45分は心身ともに疲れしました。

COMMENT of

“ハーランド選手は「裏が空いてるぞ！」とずっと指示していた”

ハ ーランド選手はスピード、パワー、サイズのすべてが凄かったです。直接のデュエルは少なかったですが5点目を決められてしまっ。動き過ぎず、常にCBの間に立ちながら一瞬の伸びや加速でゴールを奪っていくポジショニングは流石でした。その中で印象的だったのは味方に「裏が空いてるぞ！」とずっと指示していた姿。GKからパスを繋ぐチームでも、常に背後を狙っているのはまさにストライカーですよ。F・マリノスも一番怖いゾーンを意識しながら逆算してプレーしなければいけないと感じました。

ビルドアップではマンツーマンを剥がす練習を日頃からしているんですが、ロベスや皓太が潰されたりと普段はボールを失わないような間合いで足を伸ばされていました。逆に自分たちはチームメイトが「大きなロンドをされていた感覚」と言っていたように人を捕まえにいても外されてしまっていて、実際に後半はフリーでボールを持たれる時間が長かったので、マンツーマンから撤退してブロックを作らざるを得なくなりました。だから僕自身1人でボールを奪い切ったり、1人で運び切るような個で解決する能力を伸ばせるよう、日頃から意識しないといけないと感じています。



DF15

Takumi Kamijima

上島 拓巳

1997.2.5 (26歳)
186cm / 82kg



YOKOHAMA F. MARINOS #2



GK1

Jun Ichimori

一森 純

1991.7.2 (32歳)
182cm / 77kg



“ロドリ選手のミドルの瞬間、
「なんでもされるな」って思った”

ま ず自分が受けたシティのプレスで違いを感じたのは駆け引きの上手さ。嫌なところは閉めて奪いどころにパスを出させる徹底ぶりがある、自分がボールを持った時にもボランチを消しつつ、CBに行けるポジションを取ってきました。さらにシティの選手は無理も効いて、ギリギリを通そうとするとグッと足が伸びてくる。そうやってパスの選択肢を削られていったのが2失点目に繋がったと考えています。ただ一発目でエウベルに蹴って、背後を見せながら手前を空けて縦パスを刺せたりしたので、パスの使い分けがトップレベルを相手にし

ても大切だとわかりました。ゴールを守った時には、シティの止めて蹴るの精度と集中力が凄かったです。リラックスしつつもサイドチェンジやシュートチャンスのように、ゴールを意識した時の選択肢が多い。パスもシュートもいろんなコースに蹴れるようなところにボールを置いていて、特にロドリ選手のミドルシュートはインサイドで左に流し込まれたのですが、あの瞬間、僕は「なんでもされるな」って思ったんです。ちょっと前に出たら浮かされたり、ファーに打たれたりする怖さがある、前を向いた時の引き出しの豊富さに驚きました。

シティ・フットボール・グループ担当者が マンチェスター・シティ戦で見た 横浜F・マリノスの現在地

プレミアリーグ、FAカップ、CLを制した3冠王者マンチェスター・シティとの“兄弟クラブ対決”を、傘下に置くシティ・フットボール・グループの担当者はどう分析したのか？
その証言から横浜F・マリノスの現在地を探ってみよう。

文 **footballista** 編集部



7

月23日に国立競技場で激突したマンチェスター・シティと横浜F・マリノスが所属するシティ・フットボール・グループ(CFG)には現在、両クラブを含め世界各国の13クラブが加盟している。近年、J1リーグ王者が勝ち取ってきた成功を語る上でその存在は欠かせず、例えば“アタッキングフットボール”と呼ばれるチームスタイルの礎を築き上げたアンジェ・ポステコグルー前監督の就任にあたって、彼の祖国オーストラリアに乗り込んで交渉したのも2014年7月から横浜FMの少数株主となっているCFGだ。

監督人事に限らず、築き上げた国際的なネットワークを生かして経営から補強までピッチ内外のノウハウを共有している世界最大規模のマルチクラブ・オーナーシップ。そのフットボール部門で2019年5月より横浜FMの担当責任者を務めているマシュー・レア氏に、マンチェスター・シティの来日に伴い関係者を通じて話を聞いた。

マンツーマン採用の裏にある横浜FMへのリスペクト

まずマンチェスター・シティはこの一戦に向けてどのような準備を行ってきたのか？CFGを通じて内部を知るレア氏はこう証言する。

「ご存知の通り同じCFGに属するクラブとして、マンチェスター・シティは横浜FMのプレースタイルを熟知しています。加えてコーチとアナリストは試合前に対戦相手分析を入念に行い、それをもとに試合に向けた戦術を緻密に練っている。このプロセスは横浜FMにも共有されていて、お互いに対戦相手の長所と短所を明確にしていたのです」

実際にマンチェスター・シティには4人ものアナリストが来日に同行。練習でも俯瞰映像を撮るためにドローン飛ばそうと画策していたようだが、事前の飛行許可申請が必要となる日本の規制事情を知って断念したそうだ。試合中は記者席の前で机にノートPCを広げながら睨めっこを続け、前半が終了するとハーフタイムに監督や選手へ助言するためか、足早に階段を駆け下りてロッカールームへと向かって行った。

ちなみにマンチェスター・シティ監督のベップ・グアルディオラも、対戦相手の研究を減多にしないヨハン・クライフに師事したバルセロナでの現役時代を「最大の不安材料は相手がどんな戦い方をしてくるのか……。それがわからないまま試合に臨まなければならないことだった」と振り返っており、その反動で今や1日のうち6時間を分析に費やすこともあるほど。移動中も欠かさず映像をチェックしている指揮官の性格も、遠征スタッフの編成に表れていたのかもしれない。

ナタン・アケも前日会見で「監督から様々なビデオを見せられた」と明かしていた分析結果をもとに、マンチェスター・シティは横浜FMと同様に敵陣ではマンツーマンプレスを実行してきた。どちらもボールをめぐる激しく前線からプレッシャーをかけ合い、小気味良いパスワークを駆使して脱出を目指していく一進一退の攻防には、横浜FMへのリスペクトが隠れていたという。

「マンチェスター・シティは、ポステコグルー前監督の下で始まって現在ケビン・マスカット監督に受け継がれている横浜FMのプレースタイルを、とてもリスペクトしていました。両チームともにボール保持の局面を維持しながら、ボールを失ったとしても高い位置での即時奪回を目指していますからね」

「[4-2-1-3]を採用する横浜FMは、ローテーション可能なポジション、個々のテクニック、素早いトランジション、チャンス創出力がいずれも高いレベルにあります。それらを生かした効果的かつ攻撃的なサッカーを一貫することに長けている一方で、攻撃に間与する選手の枚数が多いため、守備に移行する時のトランジションに弱点を抱えていると分析しています」

「その他にマンチェスター・シティとの共通点として挙げられるのは、ビルドアップの局面でGKを組み込んでいる点です。マンツーマンプレスを仕掛けたのは、相手のGKまでプレッシャーを与えるためでしょう。そのGKの決断力とフリーの選手を見つけるタイミングが試されますからね。フリアン・アルバレスのゴールが好例です。カルビン・フィリップスのプレッシャーがGKのミスを誘い、それを見逃さなかった結果と言えるでしょう」(レア氏)



シティとの共通点は「バリエーションをもたらすCF」

そのアルバレスの得点で前半のうちに2-2に追いつかれたものの、逆に横浜FMが1対1の駆け引きを制してマンチェスター・シティのゴールを脅かす場面も少なくなかった。象徴的なのが先制した27分の得点だ。自陣中間に下がって右CBの畠中稔之輔から縦パスを引き出したCFのアンデルソン・ロベスは、ワンタッチで右ウイングの水沼宏太へフリック。ボールを触る前から食いついてきたマヌエル・アカンジの背後を確認していたA.ロベスは、素早く反転してその広大なスペースへ抜け出すと水沼からリターンを受けて一気に敵陣ペナルティエリア手前へ。追走するアカンジを跨ぎも入れた独特なリズムの仕掛けて再び振り切り、自ら打ったシュートのこぼれ球を押し込んだ。

「横浜FMに見られるもう1つのマンチェスター・シティとの共通点は、アーリング・ハーランドのようにフィジカルに長けて動き出しやゴールでバリエーションをもたらせるストライカーを擁している点です。実際にA.ロベスはマンチェスター・シティに多くの問題を引き起こしていました。185cmあるサイズとフィジカルも生かしてピッチの至るところで存在感を発揮しながら降りてプレーの基準点になれると同時に、速さと強さを生かしてDFに1対1を挑むのも得意としています。前半の彼は非常に素晴らしく、横浜FMはそのパフォーマンスからゴールとチャンスを生み出しました。あらゆるDFに挑戦状を叩きつけられる非常に優れた選手ですね」(レア氏)

37分にはビルドアップからボールを収めて両SBが駆け上がる時間を創出。永戸勝也のクロスも松原健が流し込んだ追加点の起点ともなったA.ロベスには、マークを担当したアカンジも試合後に「僕たちはオフ明け最初の試合で、いつものようなコンディションではなかったから通常時と比較するのは難しい」と前置きしながらも、「彼は素晴らしいパフォーマンスを見せていた。DFラインは非常に苦しめられたよ。難しい対応を強いられてゴールも決められたからね。非常に優れたストライカーだ」と称賛を送っている。グアルディオラも「カイル(ウォーカー)を抜くなんて」と驚いた左ウイングのエウベルを含め、「ストライカーとウインガーはとても速く、優れたプレーをしていた」と横浜FMが誇る前線のクオリティに舌を巻いていた。

3冠王者に実力を認めさせたブラジル出身の助っ人たち。「ロベスだったりエウベルだったりヤン(マテウス)だったり、強力な選手と練習できる環境はそろっている。彼らとマッチアップすることで個の能力をもっと伸ばしていきたい」とハーランドとも対峙した途中出場の上島拓巳が意気込むように、彼らは日頃からトレーニングを積む中でチームメイトに、そして試合で対戦する中で相手選手にレベルアップを促してくれるに違わず、ひいてはJ1リーグが世界との差を縮めていくためにも外国籍選手の存在は必要不可欠だ。アジアから南米まで世界中にスカウト網を張り巡らせ、50万人もの選手をデータベース化するCFGも支えている横浜FMの補強戦略は、今後もリーグ全体に影響を及ぼすと言っても過言ではないだろう。

最後にレア氏の横浜FMに対する総評を紹介して本稿を締めくくりたい。

「横浜FMがプレミアリーグクラブやCL出場クラブから遠く離れたレベルにあるとは考えていません。現時点で世界最高のチームと呼べるマンチェスター・シティを相手に披露したそのパフォーマンスを見れば一目瞭然で、拮抗した試合でした。横浜FMはプレースタイルや技術力、戦術的柔軟性から鑑みても、世界に通用するはず。そのトップレベルとの違いを強いて挙げるとすればマンチェスター・シティ戦でも勝敗を分けたいような選手層の厚さと個々の質ですが、先に行われたセルティック戦(0-4)も含めて印象的な結果と内容を披露してくれたことは自信となるに違いありません」

スカパー！ブンデスリーガジャパンツアー2023

Audi Football Summit

2023.7.29 19:03 国立競技場

川崎フロンターレ 0 1 FCバイエルン・ミュンヘン

0-0

0-1 57' ヨシップ スタニシッチ

気温 30.0℃ 湿度 55% 天気 晴、弱風 観客数 45,289人



川崎フロンターレ	FCバイエルン・ミュンヘン	川崎フロンターレ	FCバイエルン・ミュンヘン
39.1%	ボール保持率 (%)	60.9%	16 (14)
7 (1)	シュート (枠内)	21 (3)	14
436 (82.6%)	パス (成功率)	810 (90.0%)	115.5
418	バイパス***	691	111
29	30mライン進入	58	32
8	PA内進入	20	64:47
			APT***
			64:47

※パス、バイパス、30mライン進入、PA内進入はセットプレー除く
 ***バスで相手選手を飛ばした数 ***アクチュアルプレーイングタイム

川崎フロンターレ 4-1-2-3

Coach: 鬼木 達

Pos.	No.	InOut	Name
GK	1	▼46'	チョン ソンリョン
DF	3	▼63'	大南 拓磨
DF	5	▼63'	佐々木 旭
DF	13	▼46'	山根 視来
DF	29	▼63'	高井 幸大
MF	6	▼63'	ジョアン シミッチ
MF	8	▼75'	橋田 健人
MF	14	▼18'	脇坂 泰斗
FW	11	▼46'	小林 悠
FW	30	▼46'	瀬川 祐輔
FW	33	▼46'	宮代 大聖
Sub.			
GK	21		安藤 駿介
GK	22		早坂 勇希
GK	99	△46'	上福元 直人
DF	15	△63'	田邊 秀斗
DF	2	△63'	登里 享平
DF	27	△63'	松長根 悠仁
DF	38		江原 徹志
DF	39		土屋 權大
MF	16	△18'▼86'	瀬古 樹
MF	24	△63'	名願 斗哉
MF	28	△75'	大関 友翔
MF	31	△46'	山村 和也
MF	37	△86'	尾川 文
MF	41	△75'	家長 昭博
FW	17	△46'▼75'	遠野 大弥
FW	20	△46'	山田 新
FW	36		岡崎 貢太郎
FW	9	△46'	レアンドロ ダミアン

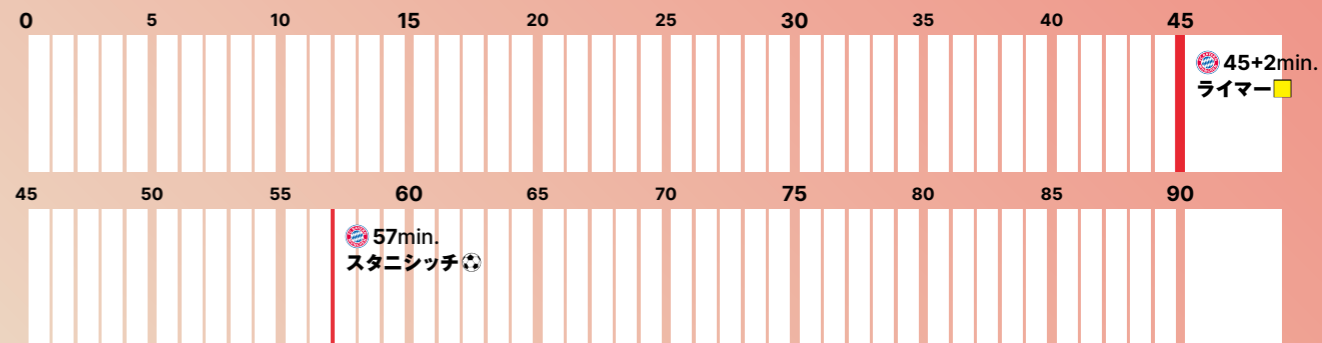
FCバイエルン・ミュンヘン 4-2-3-1

Coach: トーマス トゥヘル

Pos.	No.	InOut	Name
GK	27		ヤン ソマー
DF	3	▼46'	キム ミンジェ
DF	5	▼46'	バンジャマン バヴァール
DF	19	▼46'	アルフォンソ デイヴィス
DF	40	▼46'	ヌサイル マズラウイ
MF	6	▼46'	ヨズア キミッチ
MF	24	▼46'	コンラット ライマー
MF	42	▼46'	ジャマル ムシアラ
FW	7	▼46'	セルジュ ニャブリ
FW	10	▼46'	リロイ ザネ
FW	39	▼61'	マティス テル
Sub.			
GK	43		トム リッツィ ヒュルスマン
DF	2	△46'	ダヨ ウバメカノ
DF	20	△46'	ブナ サール
DF	4	△46'	マタイス デ リフト
DF	44	△46'	ヨシップ スタニシッチ
DF	47		アントニオ テイクビッチ
MF	38	△46'	ライアン グラフェンベルフ
MF	41	△46'	フランス クレツィヒ
MF	45	△46'	アレクサンダー バグロビッチ
MF	8	△46'	レオン ゴレツカ
FW	11	△46'	キングスレー コマン
FW	46	△61'	アリヨン イブラヒモビッチ

KAWASAKI FRONTALE 0-1 FC BAYERN MUNICH

TIMELINE



EVENTS



1min. 開始直後からの川崎Fのハイプレス

キックオフ直後からバイエルンのビルドアップにハイプレスを仕掛ける川崎F。J.シミッチのボール奪取からのショートカウンターで小林がバヴァールとの競り合いを制し、ボールを確保。その流れから脇坂が右足でボックス内からファーストシュートを放った

57min. 均衡を破ったスタニシッチの一撃

右SBのスタニシッチがハーフウェイライン付近でインターセプトし、そのままドリブルで運んでいく。グラフェンベルフとのワンツーから冷静に左足でシュートを流し込んだ



65min. 登里と遠野の連携から山田に決定機

登里のスルーパスで左サイドの深い位置に侵入した遠野が中央にクロスを供給。ゴール前で反応した山田がフリーで左足を振り抜いたが、惜しくもゴールはならなかった

COMMENT of KAWASAKI FRONTALE

鬼木 達

(川崎フロンターレ監督)

勝 てるチャンスを生かしたかったと思い、もっともっと若い選手には思い切ってやってほしかった思いがあります。実際に強度でいうと、自分たちが積極的に行けた時は向こうにも大きなプレッシャーを与えられてボールを奪っていたと思いますが、どちらかというところ奪った後のところ。特に自陣でボールを1個、2個動かすことができたら、逆に相手のインテンシティも負の状態にできる。ただ、そこで奪い返されてしまう回数が多かったかなと。外から見ていると非常にスペースがあるように思いましたし、選手の中でもまだまだもっとボールを動かせる感覚があった中で、実際にはボールを失っているシーンが多いのでその差は感じました。

COMMENT of FC BAYERN MUNICH

トーマス トゥヘル

(FCバイエルン・ミュンヘン監督)

私 たちは新シーズンに向けて準備中です。守備をしっかりして相手の攻撃に対してブロックを敷く、スペースをなるべく開けないようにする。またスピードを上げて速いサッカーをする狙いがあります。それ以上に重要なのは、チームの中の共通理解を発展させること。自分たちのボール保持率を高め、相手のボールを奪うことがとても重要だと考えています。今日の試合でも、前半はかなり試合を支配することができました。しかし後半にかなり疲れが出てしまい、チャンスを生かせませんでした。試合は0-1で終わりましたが、もっと点を取れたと思います。すぐに結果は出ないでしょうが、少し我慢をしながら時間を大切に持って準備をしていきたいです。



PHYSICAL ANALYSIS

KAWASAKI FRONTALE VS FC BAYERN MUNICH

真の意味での「強度」とは？ 課題は「運用」と「連続性」の向上

文 高口英成、松尾勇吾、大西諒（東京大学式蹴球部）
データ監修 データスタジアム

【総論】

**違いは、短い時間での出力の連続性
トップスピードへの移行、方向転換**

フィジカルな考察は、ゲームの文脈、つまり戦術的な意図によって180度持つ意味合いが異なってくる。

例えばプレシーズンマッチという事情を考慮しても、プレス時の加速や走行距離を見れば川崎フロンターレはFCバイエルン・ミュンヘンに引けを取っていないどころか、部分的には優っていたと言える。しかしフィジカルなアウトプットに対する効率という観点、あるいは相手に与えた負荷や真の意味での「強度」を考えると逆にバイエルンの方が優っていた。

バイエルンの非保持でのプレスや保持でのオフ・ザ・ボールの動きに共通していたのは、短い期間での出力を断続的に浴びせ続ける、とでもいうようなイメージの動きだった。特に、トップスピードへの短い時間での移行や、急減速によるなめらかな方向転換といった観点で考えると、川崎Fの選手を大きく上回っていたと言えるだろう。

実際にバイエルンが効率良くボールを回収できていたことから、サッカーにおける真の意味での「強度」とは個人がどれくらい長く激しくプレッシャーやオフ・ザ・ボールの動きを遂行できたか、ではなく、短い時間でのフィジカルな出力をどれだけ連続させられたか、で生み出せると言える。

加速回数全体や総走行距離ではそれほど大きな差が見られなかったことから、少なくとも今回のデータから検証できる領域においては、日本と世界の間に大きなフィジカルな素養の違いがあるわけでは

なく、むしろフィジカル能力をどう向上させ運用していくかに課題があると結論づけられる。だからこそ運動性という観点を正しく認識・評価し、向上させていくことが今後の日本サッカー全体に求められていくと言えそうだ。

1748 vs 3498

ロープレス時の加速回数 (90分換算)

ハイプレス時やミドルプレス時は互角。
だが、ロープレス時に顕著な差

総論でも述べたように、加速も減速も、重要となるのは局面という戦術的な文脈に照らし合わせた時の数値である。ここで注意しないのは、戦術的な要素が絡む以上、保持の時間や非保持の時間が長いかに補正にデータを参照することが極めて危険であるということだ。

そこで極めて簡易的ではあるが、以後はそれぞれの局面の時間を90分に引き伸ばしたと仮定した場合のフィジカルデータを見ていく(計算式は「総数÷ボール保持時間orボール非保持時間×5400秒」)。実際には90分の保持や非保持といった状況は考えにくいので、数値そのものの信頼性は乏しく、あくまでチーム同士の数値の比較に意味があることは注意されたい。

図1に示したのは90分換算の加速・急加速のチーム比較である。保持・非保持の合計による全局面での加速回数に大きな違いは見られないことが読み取れる他、加速・急加速ともに川崎Fはボール保持局面が多く、バイエルンは非保持で多いことなどが読み取れる。詳しくは戦術データの考察パートに譲るとするが、おそらくは川崎Fの方が落ち着いたボール保持の時間が作れていなかったことに由来しているだろう。

次に、非保持での守備ブロックの高さごとの加速回数を考えてみよう。図2に示したのは、上記の加速回数を90分換算したものである。ハイプレスやミドルプレスではバイエルンに引けを取らず、むしろ川崎Fの方が高い様子が伺える。一方、顕著な差として見られたのがロープレス時の加速回数の少なさであり、マンツーマンベースのハイプレスを一度突破され押し込まれると、途端に運動して距離を詰めに行くといった戦術的な行動が取れなくなる事実を示している。

23.3% vs 40.0%

CONTACT時の守備成功率

「トップスピードまで加速した状態からの
減速力・停止力・方向転換力」が不足

図3、図4に示したのは、プレス時に相手に距離を詰め、CONTACTを実現できていた割合、並びに保持時にミドルサード、アタッキングサードで相手がどれくらいプレッシャーをかけてきたか、すなわち非保持時にどれくらい相手に距離を詰めることができたかの数値である。これらが導いてくれる事実、単なる走行距離や加速回数からは推し量ることのできない、「実際に相手がどれくらいストレスを感じたか」である。

川崎FのCONTACT比率が低い事実は、そもそも距離を詰め切れていない状況を示しており、CONTACT時の守備成功率が低い事実は、仮に距離を詰めることができていても、剥がされたり、フィジカルな競り合いで負けたりすることによってプレスを空転させられている可能性を示唆している。

図1 加速・急加速の回数 (90分換算)

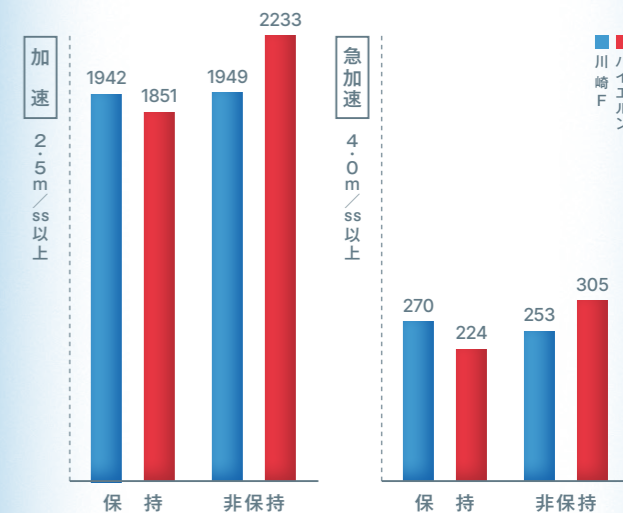


図2 守備ブロックの高さごとの加速回数 (90分換算)

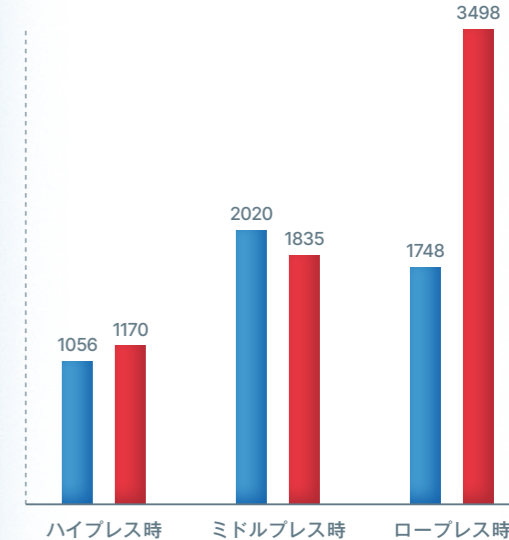


図3 プレス時のCONTACT比率とCONTACT時の成功率

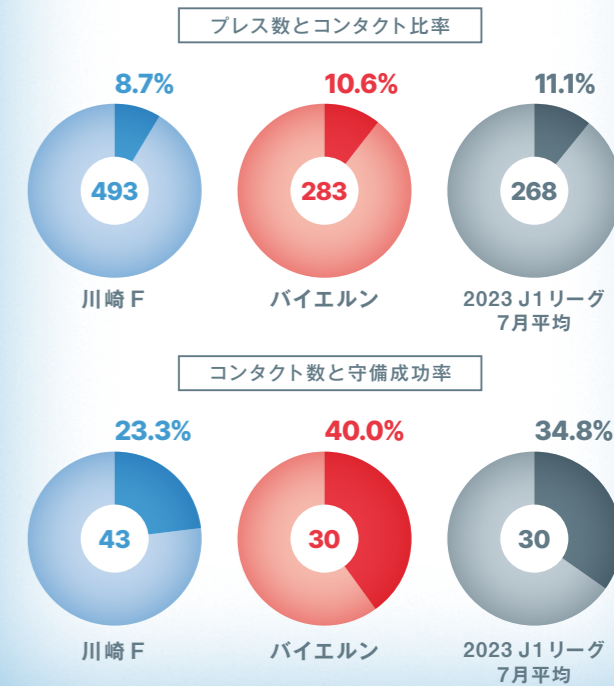
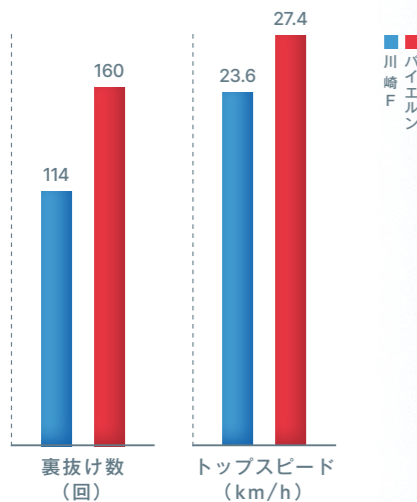


図4 パスを受けた時の直近相手選手距離

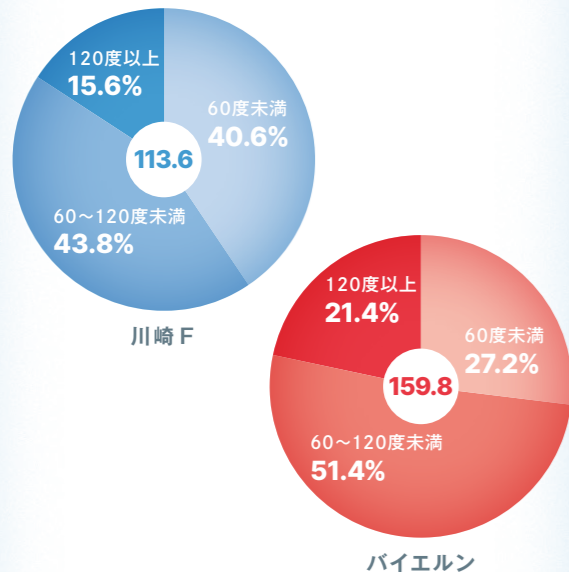


図5 裏へのアクション数 (90分換算)

裏抜け数とトップスピード平均



裏抜け時の方向転換角度



逆にバイエルンは距離を詰めれば5回に2回はボール奪取が可能となっており、J1リーグ2~7月平均と比較しても顕著な数字を残している。印象的なデータは図4からも読み取れ、ミドルサードやアタッキングサードでは、実に1m以上も選手に空間的余裕の差が生まれていることがわかる。

ここから考えられる仮説として、「トップスピードまで加速した状態からの減速力・停止力・方向転換力」が欧州のトップと比べて不足しているというのがある。コーディネーション能力の不足によって剥がされやすくなったり、それを怖がってそもそも距離を詰め切れなくなったりしているのだろうと考えられる。

また、コンタクト時の守備成功率に関しては、川崎 F は7月のJ1リーグ戦での平均では35%近くを記録している。よってこの試合でJ1リーグ平均と比較しても低い23%という成功率にとどまっているのは、川崎 F のコンタクトスキルがJリーグのチームの中でも特別低いからではなく、相手がバイエルンだったからと言えそうだ。

すなわち、距離を詰めても剥がそうとしたりショートパスを繋いだりしようとするバイエルンと対照的に、距離さえ詰め切れれば比較的容易にロングボールを蹴る傾向がJリーグにあるのだと推測できる。

逆説的には、バイエルンのようにリスクを顧みず保持にこだわるチームが少ないJリーグの現状が「減速力・停止力・方向転換力」をさほど向上させなくてもプレスが成功する、というやや歪んだ現象を引き起こしているのかもしれない。

114 vs 160

裏抜け数 (90分換算)

オフ・ザ・ボールの動きで

相手の陣形を間延びさせる工夫が足りなかった

最後にオフ・ザ・ボールの動きに関するデータを示す。図5は裏へのアクション数を表している。

試合中の裏抜けの総数を見ると、少なくない差が生まれている。実際、試合中にバイエルンの選手、特にウイングの選手が何度も裏抜けを試みるのと対照的に、川崎 F の選手のアクションは量・質ともに不足していた。

さらに注目したいのはトップスピード(裏抜けを記録した選手の平均)の差と方向転換の角度である。スピードに関しては実に4km/hの差があることがわかり、方向については角度が大きくなるにつれてより差が開いていることが見て取れる。川崎 F の選手の裏抜けはどれも比較的直線的に長い距離を走るものが多かったのに対して、バイエルンの選手が短い距離を斜めに抜けようとしていた試合の状況を如実に反映していると言えそうだ。

直線的なスプリントでは相手を振り切ることが難しく、それゆえ中・長距離の中での駆け引きを余儀なくされる反面、120度以上の角度変化であればDFにとっても対応しづらくなる。逆に考えればそのように距離やタイミングを絞っているからこそ、ピンポイントで27.4km/hもの高出力が可能になっていると推測できる。

また局面別に見ていくと、ハイプレスをかけられた時の裏へのアクションの数では川崎 F がバイエルンに大きく差をつけられており、相手の陣形を間延びさせる工夫が足りなかったとも受け取れる。実際プレス回避の成功率はバイエルンが60%に対して川崎 F は52%にとどまったが、一因として裏へのアクション数の少なさは挙げられそうである。



FW11

Yu Kobayashi

小林 悠

1987.9.23 (36歳)
177cm / 72kg



“フィジカルの差だけでなく、それ以上にビルドアップが上手い”

個人的には久しぶりの試合だったので、きつかったです。でも、45分ケガなく終えられたのはすごく良かったと思いますし、楽しかったですね。

前からのプレッシャーに相手が慣れてきて、ビルドアップで上手く剥がされるようになってから、ちょっとこっちはプレスに行きづらくなりました。いい守備ができていた時は、いい攻撃ができたんですけど、相手に対応してきて、そこからちょっと難しくなりました。しっかりみんなで構えて行ける時はいい取り方をしている攻撃に繋がったと思うので、そういう回数を

増やしていければいいのかなと思います。(マッチアップしたバイエルンのCB) キムミンジェ選手はすごくクリーンな選手で、ガツガツ来るところと、しっかり間合いを取るところ。そこら辺の臨機応変さがありクレバーな選手だなと感じました。

世界の選手との差はフィジカルもありますが、それ以上にビルドアップが上手いなと思いました。引きつけてからサポートの顔を出すタイミング、落ちてくるタイミング、ターンするタイミング。参考にしないといけないし、そこはフィジカルだけではなく、真似できる部分だと感じました。

COMMENT of

“頭のいいマズラヴィ選手の上に行くアイデアを出したい”

バイエルンの選手たちはまだ始動して間もないですね。ただ、このレベルのサッカーを経験できたのは大きな意味のある試合だったと思います。

やはり個々が剥がす能力や打開する能力があると感じました。カウンターへの迫力、スピード感はあらためて違うなど。ボールを持ったら何かする。それを一人ひとりが持っている。その中であのボール回しがあれば、それは強いだろうと思います。実際、ドイツのトップクラブですからね。あそこレベルまで自分たちが行けるのか、と言われたら、特徴として違う部分を求

めていかなければいけないと思います。自分はポジションだったり、立ち位置で駆け引きするタイプの選手。マッチアップしたマズラヴィ選手がどうしているのかを考えながらプレーしているのは、見てわかった部分もあります。ああいう頭のいい選手の上に行くアイデアを出すようにしていきたい。90分を通して試合をしたらもっと楽しかったと思います。この経験を自チームに持ち帰って、もっと世界に通用する基準でやれるように練習から取り組んでいきたいです。

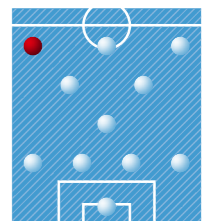


FW33

Taisei Miyashiro

宮代 大聖

2000.5.26 (23歳)
178cm / 73kg



KAWASAKI FRONTALE #1



FW20

Shin Yamada

山田 新

2000.5.30 (23歳)
175cm / 75kg



“この差を埋めていくには経験が大事。機会が多くなるほどスピードに慣れる”

自分には決定機があったので、そこを決め切れなかったのが悔やまれます。それが一番の感想です。自分としてはフィジカルがどれくらい通用するかを感じたかったので、体を当てるところはFWに入ってから意識していました。相手はベストコンディションではないですけど、もっと自分が成長していればやれるかなと感じられたのは収穫です。もちろん、身体的な差というか、普段との違いというのを感じました。いつもであれば自分が前に入るところも、足の長さやスピードで先に入られる部分はありました。ただ自分なりの予測だった

り、ポジショニングで先手を取って優位な立ち位置に立てれば、体をぶつけられてもやれるなと思いました。

バイエルンは何かする力を全員が持っていました。ボールを持った時の違いの出し方を一人ひとりが持っていたし、一人ひとりがゴールへの道筋が見えてたかなと思います。そこはまだ自分には足りない部分です。

この差を埋めていくにはやはり経験が大事だと思います。強い相手とやる機会が多くなればなるほどスピードに慣れるし、そうした相手とやる経験を積むことが必要だと思います。

求められるのは、全局面の適応力

課題は「保持時の支配力」と「非保持時のブロック守備」

文 高口英成、松尾勇吾、大西諒（東京大学ア式蹴球部）
データ監修 データスタジアム

【攻撃】

保持率は約2倍、シュート数では約3倍の差をつけられたものの、川崎フロンターレもゴールに迫るシーンはあった。だからこそ、両者に顕著な違いとして現れたのは、チャンスクリエイトの質よりもむしろ、「安定性が担保されていたか」、つまり「チャンスを作り続ける用意ができていたか」だと言える。

トランジションを想定していなければ、保持はすればするだけリスクとなってしまう。中央に厚みを残しながら保持時からできる限り均等にスペースを埋めておけば、サイドに偏っている時と比べて、誰も守っていないスペースに展開され、相手にフリーを作られる確率を大きく減らすことができる。

よって「安定性」は「ゲーム支配力」とも言い換えられ、安定性を考える上では「ポジションバランスが確保されていたか」「ポジションバランスを回復する時間を作ろうとしていたか」などが重要である。

まずは、ポジションバランスの確保がどれくらいなされていたのかを両チームの比較によって検討してみたい。

図1に示したのは5レーン、6ゾーンの30個にピッチを区切った中で、保持時にどのゾーンに何秒ボールがあったかを表している。フィ

ジカルパートと同じ計算式（25ページ参照）で保持時間による不均一をなくすために、両チームが90分保持したと仮定した場合の数値となっている。

川崎Fの右端、左端の2レーンのボールの滞在時間が、特に敵陣において非常に長いことが読み取れる。

実際に試合中も、川崎Fの選手がサイドに数的優位を形成しにかかるシーンが散見され、ボールがサイドから脱出できないこともあった。何より問題なのは、そうして空けた中央や逆のハーフスペースをカウンタールートにそのまま転用されやすいということである。

2.6 vs 3.3

クロス時のPA中央平均人数

目的地から人がいなくなってしまう

ポジションバランスに課題

川崎Fの面々がFCバイエルン・ミュンヘンと比較してボールを中心に集まる傾向にあることは別角度のデータからも明らかだ。次の図2はクロス時のPA内の味方の人数を表している。

図2を見ると明らかのように、PA内にいる人数がバイエルンに比べて0.3人、ゴール前で決定機を創出できるスペースにいる人数に至っては0.7人少ないことがわかる。中央からサイドに関わる人数が増えたがために、目的地から人がいなくなってしまう傾向にあるとも、中にポジションを取り直す時間を稼ぐことなくクロスを放り込んでしまっているとも考えられる。そのどちらの要因が支配的であったにせよ、ポジションバランスはあまり良くないことがデータから読み取れる。

7 vs 17

キャリアー数

キャリアーと遊びのパスに比例する
ポジションバランスの回復時間

次に時間の確保がなされていたかを比較してみよう。図3、図4は

それぞれキャリアー（敵と対峙して抜き去る以外の運ぶプレー）数、ブロック外を回すパスの本数を示している。

バイエルンはキャリアー数、そしてブロック外を回すパス、つまり遊びのパスが多いことがわかる。これらはどちらも配置を整えるために必要なプレーである。一般に人よりもボールの方が早く動くため、前へのパスのみの前進では配置の押し上げが間に合わなくなる。よってブロックの外を迂回したり、自陣へのバックパスを多用したり、キャリアーしたりすることでポジションバランスを回復する時間を作り出す必要がある。このように考えると、やはり安定性確保という面ではバイエルンと川崎Fとの間に少なくない差が生まれているとわかる。

【守備】

フィジカルデータの考察でも明らかになったように、連動面では課題を抱えながらも川崎Fもハイプレス局面での加速回数はバイエルンよりも多かった。その上で、戦術的な文脈でのハイプレスの有効性、そしてミドルプレス以下でのいわゆる「ブロック守備」の精度について見ていこう。

40% vs 48%

ハイプレス成功率

一度基準点がズラされると

脆い守備構造

表5はハイプレスの時間・回数・成功率および被シュート率、図6はハイプレスの強度を測る指標として使われるPPDA（低いほどハイプレスの意識が高い。計算式は「ピッチ3/5のエリアで許した相手のパス本数÷同じくピッチ3/5のエリアでの味方のタックル+ブロックドリブル+インターセプト+ファウル」）の値である。

守備の時間が多くなった川崎Fのハイプレスの時間が長いのはある意味当然ではあるが、その中で成功率や突破された後のリカバリーという観点で見ると、バイエルンを下回ることが表5からわかる。図6のPPDAの値でもバイエルンに大きく遅れを取っている。

実際にゲームを見ると、プレスの成功率が下がった要因は大きく2つほどあると考えられる。1つ目はフィジカルパートでも述べたように距離を詰めても剥がされたり、距離が詰まらずにパスを許したりといったケースが多かったこと。そして2つ目は1人で2人を管理するような守備構造がなく、ハーフコートマンツーマンのような形であったため、一度基準点がズラされると脆い守備構造だったことである。

特にバイエルンの2ボランチをマンツーマンで川崎Fのインサイドハーフが見張る形となっており、2列目と最終ラインの間にはシミツシカ残されていない状況が長く続いていた。CBが積極的に飛び出して潰そうとするも、残り3枚の最終ラインのカバーリングが遅かったのは、図7のロングボールに対して前向きに対応した最終ラインの人数を見ても明らかである。このデータからわかる通り、川崎Fが競り合う選手も含めて3人以上で対応できたシーンは1つもなかった。前向きに対応できれば一般的に守備側の方がロングボールの競り合いに強いことを鑑みても、川崎Fの回収率が低く取まってしまった背景には、ラインを早く下げる、ファーストのカバーリングに入るといった最終ラインのカバーリングの問題が大きく関わっていると言えそうである。

図1 保持時のレーン、ゾーンごとのボール滞在時間(秒)
(90分換算)

		川崎F				
		左	中央左	中央	中央右	右
↑ 攻撃方向	88.8	28.4	28.4	21.3	74.6	
	266.3	127.8	74.6	63.9	230.8	
	301.8	113.6	170.4	110.1	298.2	
	213	156.2	323.1	227.2	358.8	
	124.3	230.8	301.8	188.2	209.5	
	60.4	181.1	585.8	159.8	81.7	
合計	1054.6	837.9	1484.1	770.5	1253.6	

		バイエルン				
		左	中央左	中央	中央右	右
↑ 攻撃方向	63.9	25.1	38.8	18.3	61.6	
	228.2	146.1	180.3	91.3	148.3	
	273.9	269.3	273.9	189.4	219.1	
	221.4	317.2	493.0	187.2	226.0	
	109.6	182.6	262.5	262.5	194.0	
	61.2	59.3	273.9	180.3	141.5	
合計	894.3	974.5	1483.6	910.7	928.9	

図2 クロス時のPA全体とPA中央の平均人数

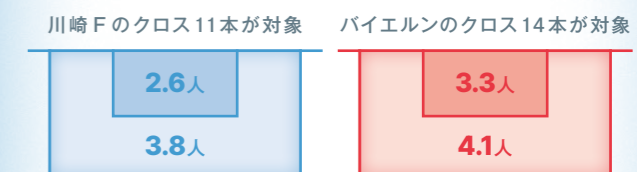


図3 キャリアー数

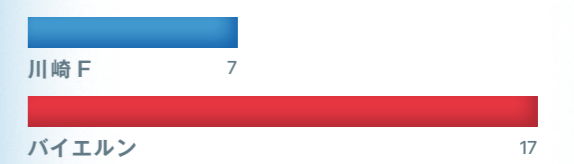


図4 ブロック外を回すパス数(90分換算)

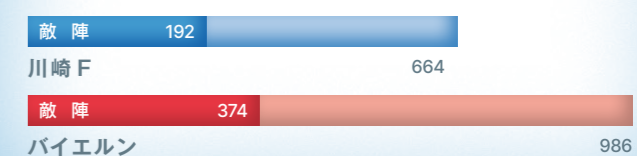


表5 ハイプレスの時間・回数・成功率および被シュート率

	時間	回数	成功率	被シュート率
川崎 F	583秒	52	40%	7.7%
バイエルン	254秒	25	48%	4.0%

図6 PPDA (低いほどハイプレスの強度が高い)

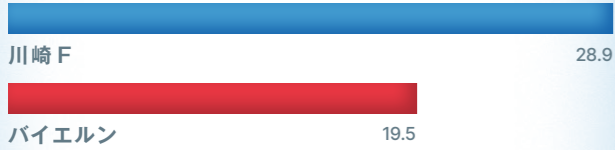


図7 ロングボールに前向きに対応した最終ラインの人数

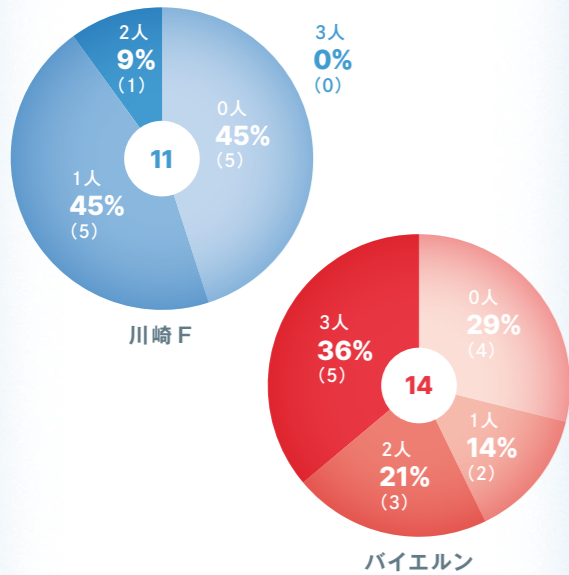
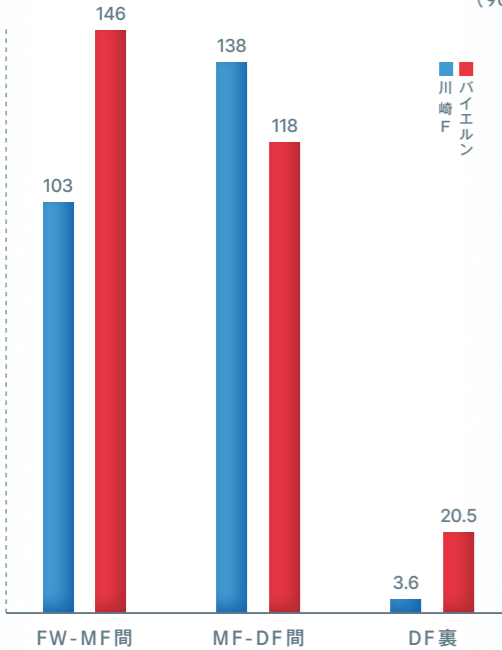


図8 アタッキングサードにおけるブロック内でのパス受け数 (90分換算)



3.6 vs 20.5

DF裏のパス受け数 (90分換算)

問題の本質は、局面による
マンツーマンとゾーンの使い分け

次にミドルプレス以下の精度について考えてみたい。図8はアタッキングサードで記録されたパスのうち、FW、MF、DFの3ラインを基準にブロック内でのパス受け数を90分換算した図である。これによってわかることは、バイエルンは川崎FのMF-DFライン間に相対的にあまり多くパスを差し込めていないものの、最終ラインの裏と、MFの手前 (FW-MF間) にはボールをよく配給できていたことであり、すなわち川崎FのFWラインが下がらされたこと、にもかかわらずDF裏のスペースを突かれていることが読み取れる。

マンツーマンでバイエルンのポランチを監視できていたハイプレス時と対照的に、ミドルプレス以下では相手のポランチにストレスがほぼかかっていなかった。最終ライン裏への配給が多いのは、バイエルンの選手の裏抜けが多いこともあるが、川崎Fの最終ラインがプレッシャーがかかっていないのに下げずに保っていたことも影響しているかもしれない。

以上から想定できるのは、最終ラインのカバーリングに代表されるような、人へのプレッシャーを高め過ぎることによるスペースを守る意識の低下と、ミドルプレス以下でのプレッシャーの甘さという、一見すると矛盾する2つの課題である。

この問題の本質はマンツーマンとゾーンという、優先順位が真逆のアプローチを局面によって使い分ける部分が整備されていないことにあると言え、それにより守備ブロック全体としての精度が下がっているように見受けられた。

ハーフコートすべてのスペースが制圧対象となるハイプレスではゾーンよりもマンツーマンの比重が高まるものの、それを突破されればゾーンを組んで撤退する、というのが標準となりつつある欧州の現代サッカーに追いつく上で、両者の境目やチームとして統率の取れた意思決定が下されているかは、日本サッカーの大きな課題になっていくのかもしれない。

[まとめ]

保持時のゲーム支配力、非保持時のブロック守備の精度という、日本サッカーの課題を垣間見ることのできた試合展開だった。プレッスンマッチという、バイエルンからすれば「調整」の位置づけの試合であったとしても、高いクオリティを目の前にすると、良くも悪くも「日本らしさ」が出てくるのかもしれない。

日本サッカーの良さという面では、数的不利でのドリブルやコンビネーションによる打開力、基準点があきりした時の個人単位で見たプレスの勢いなど、この試合の川崎Fは部分的にはバイエルンとも渡り合える強みを見せたと言える。

日本がスペインのような保持を基調とした特定の局面に特化したチームになるべきかという論争は永遠に尽きないが、1つ言えるのは様々な事象がシームレスに入れ替わり、それに迅速かつ柔軟に対応する必要のある現代サッカーにおいて、「保持時のゲーム支配力」や「非保持時のブロック守備の精度」は必須であり、それらが足りないことによる戦術的な幅のなさは致命的になり得るということである。

仮に相手が格上であったとしても、時にゲームを落ち着かせ、均衡状態を作りにいこうとする姿勢、それを可能にするメソッドの策定やフィジカル能力の向上は急務と言えそうだ。



MF8

Kento Tachibanada

橋田 健人

1998.5.29 (25歳)
169cm / 68kg



“後ろにいるシャドーの選手が
すごく嫌な位置に立っていた”

チームではどんどん前からボールを奪いに行こうと話していました。フリーの状態でもボールを持たれた局面では難しかったのですが、チームとして奪いに行くと、相手のパスコースを予測してインターセプトする部分には手ごたえをつかみました。早く予測してボールに詰めるところは、自分の持ち味でもあります。これからは伸ばしていきたいと感じた部分です。

ただボールを奪えたと思っても、その間合いを上手く剥がされてしまうことが続いたり、ボールを取れないと一気にカウンターを食ら

うことで、だんだん前から奪いに行けなくなってきました。あとは立ち位置ですね。ボールを奪いに行きにくい、嫌な場所にみんなが立っていました。自分の後ろにいるシャドーの選手もすごく嫌な位置に立っていたので、なかなか前には奪いに行けなくなりました。バイエルンは一息づきで落ちていてプレーしているので、Jリーグよりもっと強く奪いに行かないとボールを取れないという感覚がありました。それで、体力的にも消費してしまっただけの部分はないと思います。試合を通してできるようになるには、その体力をつけたいと思います。

COMMENT of

“少しでもトラップでミスをしたら
ボールを取られる感覚”

縦のスピードだったり、カウンターの鋭さはすごく迫力がありました。あとは個々でボールを狩れる選手が多く、球際の強さや近さを感じましたね。少しでもトラップでミスをしたらボールを取られる感覚がJリーグよりもありました。なのでワンタッチで叩くポジショニングや、パスを出した後にいつもより数歩離れてみたりと、自分なりにポジションを変えながらのプレーは意識していました。

攻撃では個々で崩したり打開するのは難しいと思うので、やはりグループで崩すこと。いかにして数的優位を作るのか。フリーの選手を作った

り、どこで時間を与えるのかを自分の中で意識してました。65分の決定機は、遊びのパスで相手を食いつかせたところの駆け引きも含めて全部が上手くいった崩しです。遊びのパスを入れる段階で自分が首を振ることで、ある程度の状況とスペースを頭に入れた中で、遠野大弥も同じ狙いでいてくれたので良さが出たかなと思います。

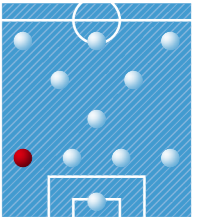
海外のクラブは自分たちが思っている基準をはるかに上回ってきますし、自分たちの基準を上げてくれる。ああいう質を求めていかないといいけませんし、選手同士でももっともっと求め合っていきたいです。

DF2

Kyohei Noborizato

登里 享平

1990.11.13 (32歳)
168cm / 68kg



KAWASAKI FRONTALE #2



DF3

Takuma Ominami

大南 拓磨

1997.12.13 (25歳)
183cm / 76kg



“ドリブルで剥がされて
前に進まれる局面が多かった”

DFラインを下げ過ぎずに、できるだけコンパクトにしてどれだけ戦えるか。個人的にそれを意識していました。簡単に裏のスペースをやられることはなかったですけど、自分たちがボールを持たれる時間が増えた中で、少しでも空いたらそこにボールが入ってくる感覚がありました。あとはドリブルで剥がされて前に進まれる局面が多くて、そうなることで、マークが1つずつズレてしまう。後ろでのマークがはっきりしないシーンが何回もありました。自分1人で2人を見る対応も難しかったです。

ハイプレスもレベルの高さを感じました。一

人ひとりがボールを取り切る力を持っている選手ばかり。スピードがあるので、ボールを前に運べたとしても追いついてきますし、そういう個人の質の高さをすごく感じました。守備のスイッチの入れるタイミングやスイッチが入った時のスピード感も後ろとしては圧力を感じました。こういう守備になったらこういうふうにはスイッチを入れるんだと、すごく勉強になりました。まだシーズンに入っていない段階で、プレススピードとインテンシティはあのレベル。ああいう選手たちに追いつくためには、日頃からそこを意識していかないといいけません。

キックを科学する

なぜロドリはインサイドキックで、ミドルシュートを決められるのか？

「世界との差」をテーマにした時によく話題に上がるのが、キックの強さだ。キック技術に関して、トッププレイヤーは具体的に何が優れているのか？ スポーツバイオメカニクスの観点から力学的にキックを研究・指導するキックコーチ、田所剛之氏に横浜F・マリノス戦で決めたロドリ（マンチェスター・シティ）のミドルシュートを例に、トップレベルのキックのメカニズムを分析してもらった。

文 田所剛之

インサイドキックはパスや近距離でのシュートに使われることがほとんどで、ペナルティエリア外からのシュートで用いられるシーンはそう多くない。そんな中でもマンチェスター・シティ所属のロドリは、インサイドキックでの中距離からのコントロールシュートを再現性高く決めている数少ない選手である。ここでは、ロドリのようにミドルシュートとして使えるほどの球速をインサイドキックで実現するために必要な要素を、横浜F・マリノス戦で決めたゴールを例に力学的に考察する。

インサイドキックとインステップキックの科学的な違いは？

まず、球速を最大化する目的で利用されるインステップキックとの違いを考える。球速を高めるためにはインパクト瞬間の蹴り足の速度、特に蹴り出し方向への速度を高めることが重要であるが、どちらのキックにおいても蹴り足の加速に最も大きく貢献する関節運動は膝関節伸展である。ただし、2つのキックではインパクト位置が異なるため、インパクトの瞬間に膝関節伸展により生み出される蹴り足の速度の方向は異なる。

具体的に言うと、インステップキックでは足の甲でインパクトするため膝蓋骨、いわゆる膝のお皿が蹴り出し方向正面を向いた状態でインパクトするが、インサイドキックでは足部内側でインパクトするため膝蓋骨の向きは蹴り出し方向に対して外側を向いた状態で

インパクトすることになる。膝関節伸展による蹴り足の運動方向は膝蓋骨が向く方向に一致するので、膝関節を伸展させるとインステップキックでは蹴り出し方向へ蹴り足が加速されるのに対して、インサイドキックは蹴り出し方向からずれた方向へ加速されることになる。これがインサイドキックで球速を出しづらい最大の理由である。

ロドリのインサイドキックの特徴は 股関節外旋による蹴り足の加速

よって、インサイドキックの球速を高めるために重要なのは、他の関節運動を組み合わせることにより蹴り足の運動方向を蹴り出し方向へ向けることだ。その役割を担うのが股関節外旋である。股関節外旋とは厳密に定義すると大腿骨の長軸周りの回転で、イメージとしては膝の位置を動かさずに膝から下を左右に動かすような動きである。これによって生じる蹴り足の運動を表す模式図が以下である。

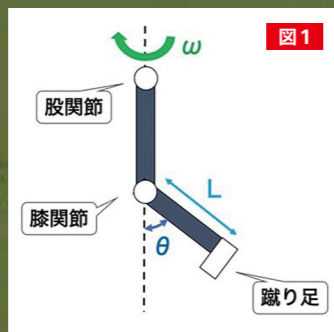


図1のように膝関節が角度 θ だけ屈曲している場合、股関節外旋角速度 ω 、下腿の長さ L とすると、 $\omega L \sin\theta$ の足部速度が生じる。この時の運動方向は膝蓋骨と直行するため足部速度を蹴り出し方向に向けることができる。実際にロドリのゴールシーンでは、膝蓋骨の向きが蹴り出し方向正面に向いている状態から急激に外側に向くように変化しており、大きな股関節外旋角速度を持っていることがわかる。このインパクト瞬間の股関節外旋角速度の大きさこそがロドリの最大の特徴である。

ポイントはインステップと同様の動作から 股関節を外旋させる

では、股関節外旋による足部速度の大きさ $\omega L \sin\theta$ を大きくする方法を考えよう。式中の L は不変なので、 ω 、 θ について考える。まず θ についてであるが、インパクトの瞬間に $\theta = 0$ 、つまり膝が伸び切っていると股関節外旋による蹴り足の加速は生じない。よって、膝関節を屈曲した状態でインパクトする必要があり、ロドリのゴールシーンでもインパクト時の膝関節は屈曲している（3参照）。すでに述べた通り蹴り足の加速には膝関節伸展が最も大きく貢献するため、膝を伸展させる動きを強く出した上でもなおインパクトの瞬間に膝関節がある程度屈曲している必要があることになる。よって、1つ目のポイントは膝関節の最大屈曲角度を大きくすることである。膝関節の屈曲角度を大きくする際の注意



ロドリのミドルシュートの連続写真。キックモーションの初動はインステップキックのように正面方向から蹴り出しているが、インパクトの瞬間に急激に股関節が外旋してインサイドキックに変化している

点は蹴り脚を後ろに振り上げず、むしろ膝を前に素早く持っていくこと。これはスプリント動作にも見られる動きであるが、膝を前に持っていき股関節屈曲の動きは膝関節の屈曲を誘導する。この関係性を用いて膝関節を屈曲→伸展させると効率良くエネルギーが伝達されるが、自ら蹴り足を後ろ方向に振り上げるような動きを用いるとエネルギー効率が落ちてしまうので注意が必要である。

続いて、股関節外旋角速度 ω について先ほどと同様のモデルで考える。

大腿骨の長軸周りの慣性モーメントを I 、股関節外旋トルクを T とすると、回転運動の運動方程式より $\frac{d(I\omega)}{dt} = T$ が成り立つ。よって、 ω を大きくする最も単純な方法として股関節外旋トルク T を大きくすることが挙げられる。股関節外旋トルクとは関節を回転させる力なので、この値を大きくする最も単純なアプローチは筋力を上げることである。

これはフィジカル的な要素に寄ったポイントだが、もう1つ技術的な要素が存在する。ここで注意すべきはインサイドキックでは股関節外旋と膝関節伸展が同時に起こることから慣性モーメント I が時間的に変化することだ。下腿を一樣な剛体棒と見ると慣性モーメントは中心軸からの距離の二乗に比例するので、 I は $L^2 \sin^2\theta$ に比例することになる。 $\frac{d(I\omega)}{dt} = T$ より同じ大きさのトルクを加えた場合でもインパクトの瞬間と股関節外旋トルクを発揮している間との慣性モーメントの差が大きいほどインパクト瞬間の股関節外旋角速度は大きくなるのがわかる。よって、 $\sin^2\theta$ が最大になる膝関節屈曲角度 90° で股関節外旋角速度が生み出されていることが望ましいと言える、そもそも膝関節屈曲の最大値は 90° 以上になる必要がある。この点からも1つ目のポイントとして挙げた膝関節の最大屈曲角度を大きくすることが有効であると言える。また、膝関節屈曲 90° 付近ですでに股関節外旋角速度が生じ、インパクトの瞬間に大き

な股関節外旋角速度を実現したいのであれば、股関節を大きく外旋させるためのゆとりを確保するために膝蓋骨＝膝のお皿の向きが蹴り出し方向に対して外側を向かないようにスイング動作に入る必要がある。ゆえに、2つ目のポイントは、キック動作の初動段階ではインステップキックと同じく膝蓋骨の向きを蹴り出し方向に向けることである。

以上の2点、「膝を大きく屈曲する」「膝蓋骨の向きを蹴り出し方向に向ける」というポイントを抑えるとインステップとほぼ同じ動作になる。実際にロドリのキックは途中まで抜き取るとインステップがインサイドかを見極めるのは難しい（1と2参照）。

このようにインステップキックと同様の動作から途端もない速さで股関節を外旋させ、蹴り足を最大限加速できるのがロドリのインサイドキックの独自性であるが、実はここで解説したようにインステップキックと同様の動作を取ることで自分が股関節外旋角速度を高めることに繋がっているというのが技術的に重要なポイントである。

Takeyuki Tadokoro 田所剛之

2023年東京大学卒業。スポーツバイオメカニクス研究室にてインサイドキックを研究した。在学中にキック専門トレーニングKicking labを創業。小学生からJリーガーまで幅広い層を指導し、2023年4月には書籍も出版した。

Audi Football Summit
powered by docomo
2023.7.26 19:30 国立競技場

FCバイエルン・ミュンヘン **1** **2** マンチェスター・シティ

0-1 21' ジェームズ マカティー

81' マティス テル 1-1 86' アイメリック ラポルテ

気温 30.8℃ 湿度 52% 天気 晴 観客数 65,049人



FCバイエルン・ミュンヘン 4-2-3-1

Coach: トーマス トゥヘル

Pos.	No.	InOut	Name
GK	27	▼46'	ヤン ゾマー
DF	2	▼46'	ダヨ ウバメカノ
DF	5	▼46'	パンジャマン バヴァール
DF	19	▼46'	アルフォンソ テイヴィス
DF	40	▼46'	ヌサイル マズラウィ
MF	6	▼46'	ヨズア キミッシ
MF	24	▼46'	コンラット ライマー
MF	42	▼46'	ジャマル ムシアラ
FW	7	▼46'	セルジュ ニャブリ
FW	10	▼46'	リロイ ザネ
FW	11	▼46'	キングスレー コマン
Sub.			
GK	26	△46'	スヴェン ウルライヒ
GK	43		トム リッツィ ヒュルスマン
DF	20	△46'	ブナ サール
DF	44	△46'	ヨシップ スタニシッチ
DF	47	△46'	アントニオ ティクビッチ
MF	14	△46'▼82'	パウル ヴァナー
MF	32	△46'▼82'	ガブリエル ヴィドビッチ
MF	38	△46'	ライアン グラフェンベルフ
MF	41	△46'	フランス クレツィヒ
MF	45	△82'	アレクサンダー バヴロビッチ
MF	8	△46'	レオン ゴレッツカ
FW	17	△46'	サディオ マネ
FW	39	△46'	マティス テル
FW	46	△82'	アリヨン イブラヒモビッチ

マンチェスター・シティ 4-1-2-3

Coach: ペップ グアルディオラ

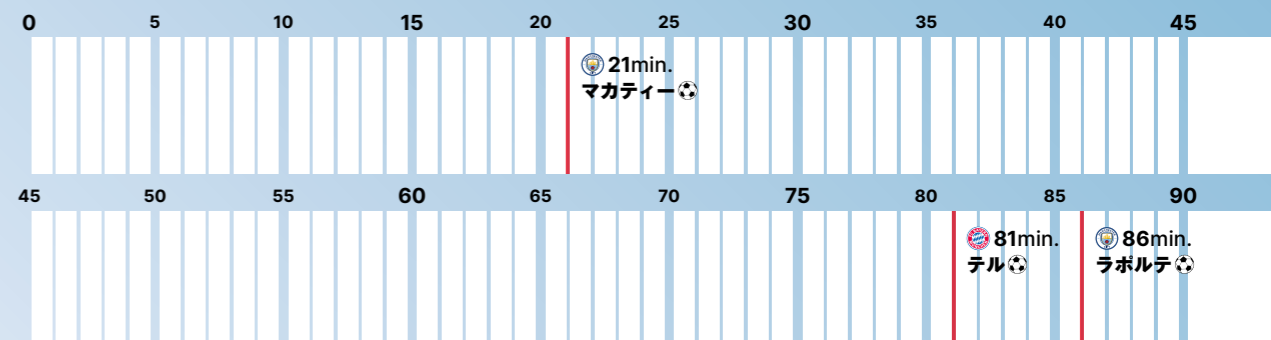
Pos.	No.	InOut	Name
GK	31		エデルソン
DF	2	▼46'	カイル ウォーカー
DF	3	▼46'	ルーベン ディアス
DF	5	▼46'	ジョン ストーンズ
DF	6	▼30'	ナタン アケ
DF	82	▼46'	リコ ルイス
MF	8	▼46'	マテオ コパチッチ
MF	10	▼46'	ジャック グリーリッシュ
MF	20	▼71'	ベルナルド シウバ
MF	87	▼46'	ジェームズ マカティー
FW	19	▼46'	フリアン アルバレス
Sub.			
GK	18		オルテガ モレノ
GK	33		スコット カーソン
DF	14	△46'	アイメリック ラポルテ
DF	21	△46'	セルヒオ ゴメス
DF	25	△30'	マヌエル アカンジ
DF	7	△46'	ジョアン カンセロ
MF	16	△46'	ロドリ
MF	17		ケビン デ ブライネ
MF	32	△71'	マキシモ ペッロネ
MF	4	△46'	カルビン フィリップス
MF	47	△46'	フィル フォーデン
MF	52	△46'	オスカー ボブ
MF	80		コール パルマー
FW	9	△46'	アーリング ハーランド

FCバイエルン・ミュンヘン	マンチェスター・シティ	FCバイエルン・ミュンヘン	マンチェスター・シティ
39.0%	ボール保持率 (%)	61.0%	19 (14)
12 (5)	シュート (枠内)	14 (6)	14
463 (86.2%)	パス (成功率)	697 (90.7%)	116.9
434	バイパス***	740	130
24	30mライン進入	55	57
9	PA内進入	12	67:24
			APT***
			67:24

※パス、バイパス、30mライン進入、PA内進入はセットプレー除く
***バスで相手選手を飛ばした数 ***アクチュアルプレーイングタイム

FC BAYERN MUNICH 1-2 MANCHESTER CITY

TIMELINE



EVENTS



21min. シティ生え抜きのマカティーが先制弾

ウォーカーのスルーパスに反応したルイスが敵陣深い位置まで侵入してマイナスのパス。アルバレスのシュートはGKゾマーにセーブされるも、詰めていたマカティーが押し込んでシティが先制に成功した

81min. フランスの逸材テルが結果を出す

クレツィヒがペナルティエリア左からクロスを提供。ゴール前で合わせたヴァナーの至近距離からのシュートは一度GKに防がれたが18歳のテルが押し込んで、押され気味だったバイエルンが同点に追いついた



86min. セットプレーの流れからラポルテが決勝点

同点となったことで、再度ギアを上げたシティ。右サイドのショートコーナーから素早く攻撃を再開すると、フォーデンがペナルティエリア右からシュートを放つ。そのこぼれ球を冷静にパスし、最後はCBのラポルテがゴールネットを揺らした

COMMENT of FC BAYERN MUNICH



トーマス トゥヘル (FCバイエルン・ミュンヘン監督)

まずはマンチェスター・シティと試合ができてうれしかったです。日本に来て間もなかったもので、今朝も練習をしていました。蒸し暑さと時差ボケがあったことを考えても、トレーニングやコンディションはまだまだ理想的ではないですが、悪くない結果です。実際に私たちも(ストライカーの)選手を探している厳しいチーム事情の中で、チャンスもかなり作れていましたからね。後半はかなり選手交代をして若手も起用できました。そして同点に持ち込めましたが、最後に及ばず負けてしまった。ただ、この試合に向けて取り組んできた中で、上手くいったところもあります。新加入選手もいるので、ここから練習を重ねてさらに改善していきたいです。

COMMENT of MANCHESTER CITY



ペップ グアルディオラ (マンチェスター・シティ監督)

内容には満足しています。バイエルンはボールを奪われると驚くべき速さで取り返そうと動いてきました。おかげで良いテストになりましたね。あとはケガ人が出なかったことが何よりです。コンディションはまだまだトップにはほど遠いので、結果はそれほど重視していません。いくつかミスもありましたが、今はむしろ何がチームに不足しているのかを知ることを大切にしています。ハーランドは今日のように無得点に終わる試合もありますが、チームにとってもよく馴染んでいます。システムにも合っていて、昨季は52得点も奪ってくれました。彼は私が何か言わなくても、自分で課題を見つけて改善に取り組む向上心を持っていて、何も問題ありませんよ。

DETAILED MATCH STATS

3試合の深掘りしたチームスタッツを 2023シーズンのJ1リーグ平均と比較

表1 走行距離、スプリント、ラン関連

	総走行距離 (km)	スプリント数	スプリント距離 (km)	ハイスピード距離 (km)	ラン距離 (km)
横浜FM	119.6	128	2.03	6.61	16.0
マンチェスターC	117.0	143	2.29	6.50	15.7
バイエルン	116.9	130	2.45	6.47	16.1
マンチェスターC	112.5	119	2.07	6.30	15.1
川崎F	115.5	111	1.85	6.85	15.3
バイエルン	113.9	121	2.20	5.28	14.4
J1リーグ2~7月平均	114.4	125	2.18	6.44	15.1

スプリント距離：25km/h以上の総移動距離 (2022シーズン以前は24km/h以上)
 ハイスピード距離：20km/h以上25km/h未満での総移動距離 (2022シーズン以前は21km/h以上24km/h未満)
 ラン距離：15km/h以上20km/h未満での総移動距離 (2022シーズン以前は14km/h以上21km/h未満)

表2 バス距離・方向別の本数と成功率

	ショート	ショート成功率	ミディアム	ミディアム成功率	ロング	ロング成功率	前方	前方成功率
横浜FM	238	84.9%	131	85.5%	46	52.2%	119	63.9%
マンチェスターC	491	91.0%	241	92.5%	47	83.0%	181	85.6%
バイエルン	248	87.5%	181	92.3%	34	44.1%	138	70.3%
マンチェスターC	423	90.3%	220	94.1%	54	79.6%	170	83.5%
川崎F	261	85.4%	136	84.6%	39	56.4%	132	69.7%
バイエルン	494	90.9%	273	93.0%	43	60.5%	221	76.9%
J1リーグ2~7月平均	236	79.6%	157	81.1%	55	48.1%	158	57.7%

ショート：到達位置までの距離が15m未満のパス
 ミディアム：到達位置までの距離が15m以上30m未満のパス
 ロング：到達位置までの距離が30m以上のパス
 前方パス：チームの攻撃方向に対して前方90度のパス

表3 タックルとファウル

	タックル数	タックル奪取率	ファウル数
横浜FM	14	50.0%	6
マンチェスターC	19	73.7%	4
バイエルン	19	73.7%	7
マンチェスターC	9	77.8%	5
川崎F	16	87.5%	13
バイエルン	14	71.4%	7
J1リーグ2~7月平均	18	64.8%	12

表4 こぼれ球奪取率

	全エリア奪取率	アタッキングサード奪取率	ミドルサード奪取率	ディフェンシブサード奪取率
横浜FM	40.8%	37.5%	25.0%	52.4%
マンチェスターC	59.2%	47.6%	75.0%	62.5%
バイエルン	41.2%	37.5%	26.3%	54.2%
マンチェスターC	58.8%	45.8%	73.7%	62.5%
川崎F	44.2%	36.8%	61.1%	33.3%
バイエルン	55.8%	66.7%	38.9%	63.2%
J1リーグ2~7月平均	50.0%	49.9%	50.0%	50.1%

図5 プレス数と守備成功率

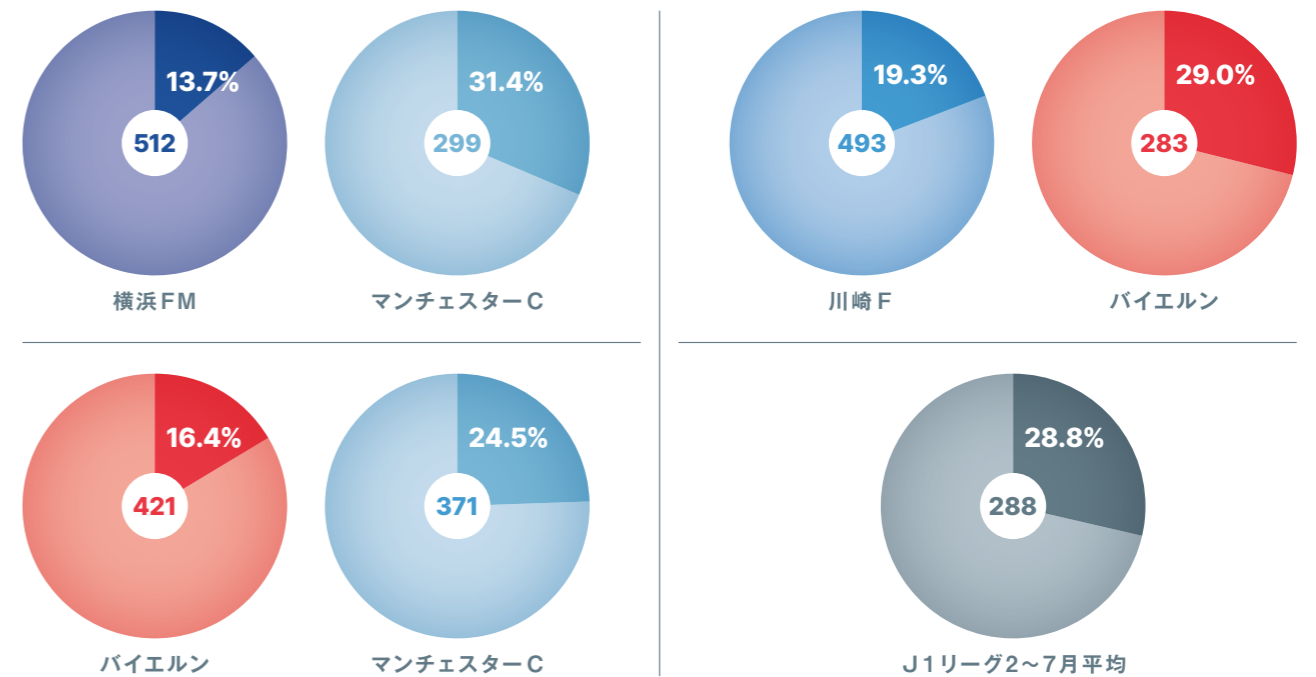


図6 アクチュアルプレーイングタイム (秒)

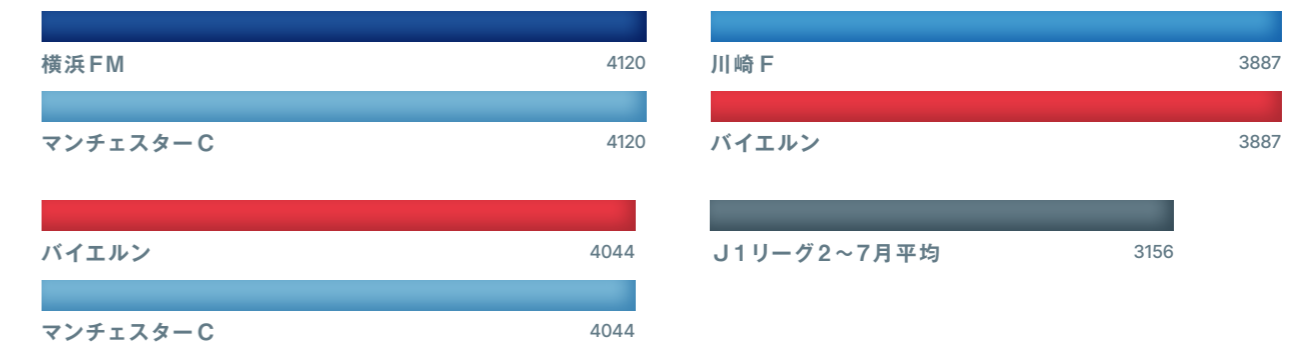
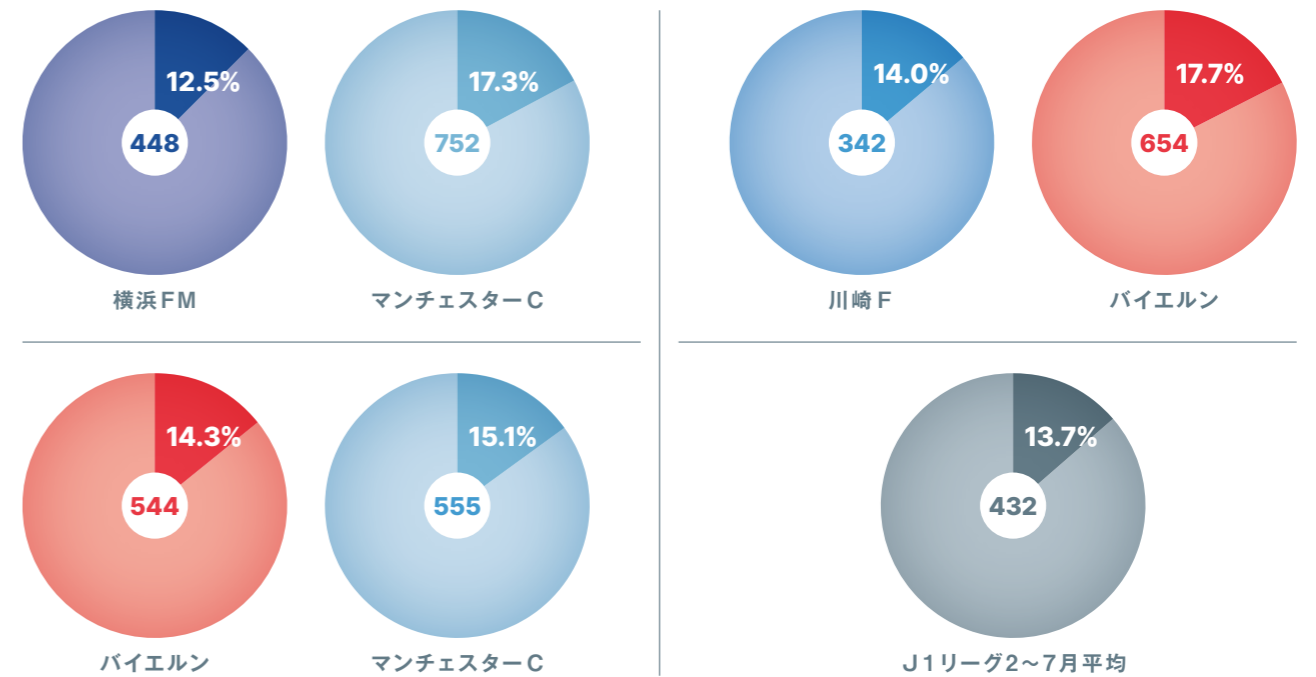


図7 ポジショナルアクセラ*の総数とパス受け率



* ボール保持チームの中で、ボールを持っていない選手が直近の相手選手から離れつつ一定以上の加速をする動き

総括コラム

データから何が語りうるか 何が語りえぬか、 そして何を語るべきか

文 林舞輝（浦和レッドダイヤモンズ コーチ兼分析担当）

今回のテクニカルレポートの総括として、筑波大学蹴球部と東京大学ア式蹴球部の分析を見てもらった上で、FIFAクラブワールドカップでマンチェスター・シティと対戦する可能性がある浦和レッズのコーチ兼分析担当の林舞輝氏に「リーグの現場視点から、データ分析から得られる視点と活用法について見解を聞いた。

「世界」とは何なのか？ 「差」なのか、 「違い」なのか？

「世界との差を可視化する」これが今回のレポートのテーマだ。そのフレーズの耳触りは心地よく同時に大義を感じる。しかしながら、こんなにも慎重に吟味していかねばならないフレーズも、またないだろう。私たちがサッカーという愛すべきそして憎らしいスポーツへの理解を深めようとする上で、そして日本サッカーを日々進化させていく上で、甘い香りの危険で野蛮なワードこそ、「世界」、そして「差」なのではないか。

「世界のサッカーは～」という言葉は誰しもがよく耳にする。では、サッカーにおける「世界」とは何を指すのだろうか。世界＝欧州サッカーが多くの人々のイメージするところだと思うが、果たして本当だろうか？

日本はFIFAワールドカップでいまだに相手開始1分で退場した2018年ワールドカップのコロンビア戦を除くと、中南米のチームに全敗している（アルゼンチン、ジャマイカ、ブラジル、パラグアイ、コロンビア、コスタリカ）が、彼らは私たちが相手にし比べるべき「世界」ではないのか。世界一熱狂的なスタジアムと呼ばれるアルゼンチンのラ・ボネネラ（ボカ・ジュニアーズのホームスタジアム）は「世界」ではないのか。世界トップの選手たちを集め名実ともに本気で世界最高レベルのリーグを目指しているサウジアラビアリーグは「世界」ではないのか。

つい最近のFIFAワールドカップ カタール2022で、私たちはその「世界」の広さを思い知ったはずである。開幕戦から決勝までの一戦一戦で見られたのは、サッカー文化のぶつかり合い、価値観のぶつかり合い、ある意味では異種格闘技のような戦いだった。国によって興奮するプレーが違い、美しいと思うプレーが違い、拍手を送るプレーが違う。イングランド人はタックルに大喝采を浴びせ、日本では「三笥の1ミリ」が全国民のスマホ画面に拡散され、クロアチアはPK戦になったら勝ち同然とも思っているような戦いぶりから実際に極限状態のPK戦で当たり前にゴールネットを揺らし続けた。アルゼンチンは若い選手たちが自分の幼少期の大スターリオネル・メッシのために靴下とユニフォームを真っ黒にしながらピッチ上を走り回った。どれも私たちが戦っている「世界」のサッカーなのだ。

そして、もう1つの震となるワードが「差」

である。ナショナルチーム、リーグ、サッカー文化などすべての分野で何かと他国と比較することが多々ある中で「差」と「違い」を見分けることが非常に困難であることも、また事実であるからだ。

優勝候補であったスペインは、「三笥の1ミリ」によって日本に敗北した。スペインの選手は、堂々のクロスボールが転がっている途中でもう足を止めて手を挙げてオフサイドをアピールしていた。日本は、三笥が諦めずに追って極限まで足を伸ばし、中には三笥が折り返すことを信じて（手を挙げていたスペインの選手を置き去りにして）仲間が詰めていた。これは逆の見方をすれば、スペインにとってワールドカップで直面した「世界との差」になり得るのかもしれない。では、この差を縮めるために「ボールが外に出るまで最後までボールを追う」「仲間を信じる」ことがスペインサッカーの今後の方針になるのだろうか。日本はスペインのように華麗に永遠とボールを回し続けることはできなかったが、スペインもまた日本のように誰一人として一瞬たりともサボったり集中を切らしたりすることのない粘り強く我慢強い守備はできなかった。

これは果たして、優劣があり上と下に分けられる「差」と受け止めるべきなのだろうか。それともこれは、日本とスペインの「違い」なのだろうか。赤と青は異なるカラーだが、赤の方が上とか下とか、そこに優劣があるわけではない。

カタールワールドカップの FW登録選手で 最もフィジカルデータが 低かったのは…

フィジカルデータまたは戦術データの分析を進める際に、大前提として知っておかねばならないことがある。それは「データで優れていることが勝利に直結するとは限らない」、そして「あらゆるデータは自チームの戦術、相手チーム、環境など不特定多数の変動要素に依存し、あくまで両チームが勝利を目指しプレーした後に生まれた副産物に過ぎない」という至極、当たり前の事実である。

つまり、データを比べて「はい、ここが足りません」「はい、ここに改善の余地があります」「はい、ここに差があります」といった短絡的な考えは、サッカーというスポーツに関しては必ずしも役に立たない。

Aという選手が1試合で12キロ走り35回スプリントしたとする。Bという選手は、1試

合で8キロしか走らず、スプリントは20回だったとする。フィジカルデータ的にはAという選手が優れていたことになる。だが、その選手が本当に必要な時に必要な場所に必要なタイミングで必要なスピードで走ったとは限らない。A選手の走行距離の半分は、不適切な時間帯に不必要な場所へ誤ったタイミングで周りに合わせずに速過ぎるランニングをしていたかもしれない。一方でB選手の走行距離はすべて、必要な時に必要なスペースへ完璧なタイミングで状況に合わせたスピードでのランニングだったかもしれない。だとすると、B選手の方が優れた選手ということになる。

実際に、FIFAのカタールワールドカップにおけるFW登録の全選手のフィジカルデータの研究では、「世界最高のFW」と呼ばれている messi、Emバベ、レバンドフスキの3人が、走行距離と高強度ランニング距離の両方の指標で最も低い数字を残した。

同時に、上記のFIFAの研究はカタールワールドカップのフィジカルデータ分析において、測定された様々なフィジカルデータの指標と勝率に正の相関関係は存在しなかったと結論づけている。実際に優勝したアルゼンチンは試合ごとの平均走行距離は32カ国中で下から3番目、高強度ランニングの平均距離は下から5番目だった。また、日本の壁ベスト8に進出した8カ国の中で、出場32カ国全チームの平均値より上回った平均走行距離を記録したのは、ポルトガルのみだった。つまり、ベスト8のうち7チームが大会平均値より下回る走行距離で勝ち進んでいったのであり、どちらかと言えばデータ上では「勝ち進んだのは走っていないチーム」だったということだ。

極端に言えば、長いシーズンを戦うリーグ戦はもちろんのこと、短い期間で何試合もこなすワールドカップのような大会であれば、フィジカル的な負担がないサッカーで勝った方が良いという考え方もある。走らないでサポって勝つことほど効率の良いものはない。

そしてデータ分析におけるもう1つの重要な大前提が、繰り返しになるがデータというのは両チームが勝利を目指してプレーする中で生まれた副産物に過ぎない、ということだ。「うちのチームはスプリント数が足りない」と言ってスプリント数を増やすためにトレーニングする、それはまさに本末転倒だろう。勝つためにプレーし、勝つためにチームの様々な面を向上させた結果として、スプリント数が増えたり、または減ったりすることに後から気づくだけの話だ。

例えば、自チームが自陣深く守ってロングカウンターで仕留めるのが得意なチームだと

しよう。だとすれば当然、前方向への長い距離のスプリントの数は増える。では逆に、そのような特徴を持つチームと対戦するとしよう。そうすると当然、自チームは相手陣内まで攻め込むがそこでロングカウンターを食らうので、その時に自陣に向かって後ろ方向へ長いスプリントをする機会が増えるのが自然だ。にもかかわらず、そのデータを見て「うちのチームは前方向へのスプリントが少ない。ここを改善しなければ！」と言い出すのは非常にナンセンスである。

実際に、カタールワールドカップでの日本の試合ごとのチーム走行距離データを見ると、最長を記録したドイツ戦と最短を記録したコスタリカ戦で、実に16.3kmもの開きがある。選手1.5人がいないぐらい分の走行距離のロスである。では、日本はコスタリカ戦でサポっていたのか、またはコンディションが悪かったのかと言われると、あの舞台でそんなことがあり得るわけがない。データには、このような自分たちと相手の戦術や相性や力関係だけでなく、気候や天候、その時のスコアなども関わってくる。両チームが勝利を争う中でそういった複合的な要素も合わさって生み出される、つまりあくまでゲームのコンテキスト、ストーリーの文脈によって生まれる副産物がデータであるにもかかわらず、出てきた数字を見比べて何かに言及しようというのは、まるで「川の向こうの桜はもう咲いているのに、こっちの桜はまだ咲いてない。おかしいなあ」と言いながら、咲いている花びらとまだ咲いていない蕾を一生懸命見比べるようなものである。

もし、その理由が知りたいのであれば、見るべきは日当たりであって、土壌であって、剪定時期などであろう。様々な外的変動要素が複雑に合わさった最後の結果として現れるだけの花びらを見比べても、答えは見つからない。

「裏抜け数」が少ないというデータ分析から何が読み取れるか？

今回の分析を振り返った時、選手個々のコメントからわかる通り、選手の目線ではミクロな視点で様々な学びと経験が得られたと言えるだろう。しかしながら、チームとして比べた時、欧州クラブにとっては慣れていない日本の猛暑の中で、それもプレシーズン初期でまだコンディションが上がっていない状態、



それに加え選手交代をほぼ無制限にできるのではほとんどの選手が45分で交代、その中にはトップチームでほとんど活動していない若手も含まれる、というような公式戦とはかけ離れた条件だったことは忘れるべきではない。アカデミックな分析との相性が良い試合だったかと聞かれると非常に大きな疑問符がつく。しかし、その中でも筑波大学蹴球部と東京大学ア式蹴球部が非常に興味深い分析を行ってくれた。

両者の分析に共通していたのは、ボール保持時の相手DFラインの背後への「裏抜け」の数だった（詳細な分析や数字、定義等の説明は、両者のレポートを参照いただきたい）。川崎フロンターレとFCバイエルン・ミュンヘンというチーム単位で比べた場合、またはハーランドという個人の選手にフォーカスした時に、ボール保持時の「裏抜け」に参考にすべき部分があるのではという分析は、非常に示唆に富む指摘のように思えた。もちろん前述の通り、このデータ分析から、「世界との差はこれです」「裏抜け数を増やしましょう」というような言葉を流布し、現場に「裏抜けをもっとしろ」と落とし込もうとするのは、あまりにも浅はかである。

例えば、相手がDFラインを低く設定していれば背後に抜け出すスペースはないし、逆に相手もものすごくラインを高く設定するチームであれば当然、背後に抜け出す動きは多くなる。仮に試合の序盤で数点差のリードを得てしまえば、そもそも裏抜けする必要もなくなる。チームを他者との動的な相互関係によって成り立つ生態系という視点で見れば、背後にパスを出せる選手がいなければ前線の選手は動き出さないし、裏に抜けられるスピードのある選手が前線にいないればそこへのパスも出ない。背後に中長距離のスルーパスを出せる選手がいて、背後に抜ける前線の選手がいて、相手の配置によって背後にスペースがあって、そして試合展開の中でその必要性があって初めて、「意味のある裏抜け」は成立する。単に裏抜けする必要がなかったから裏抜け数が少ないだけだとしたら、余計なお世話になってしまうだろう。繰り返しにはなるが、あくまで「裏抜け数」というデータは、試合の中での様々な複雑な要素が影響し合って生まれた「副産物」に過ぎないのだ。

一方、データから現代サッカーの流れを読み取ったり、リーグの特色をつかんだりという、「副産物」からの逆算は、サッカーへの考察を深める上で有用な手段にもなり得る。選手たちがピッチに残っていたデータという足跡をたどっていけば、それが今後どういった方向へ向かっているのか予測することがで

きるかもしれないし、足跡を逆からたどっていけばそれが一体どこから来ているかという推察を進めることができる。

今回のレポートで指摘された「裏抜け数」に関して、実際にFIFAのカタールワールドカップのフィジカルデータ分析レポートでも、ベスト8のうち実に5カ国がボール保持時のスプリントした距離で上位に入っていることに注目している（なおチームのボール保持率が高ければ高いほどこの数字は大きくなってしまっているので、全チームが90分間ずっとボールを保持したと仮定した場合のスプリント距離として正規化してある）。特に、優勝したアルゼンチンは走行距離では下から3番目、スプリントの距離でも全32カ国の中で平均に近い数字であるにもかかわらず、ボール保持時のスプリント距離ではトップから3番目の数字を記録している。つまり、他国と比べてボール保持時のスプリントを含んだアクションがそれだけ多かったということだ。これはもしかすると、森保監督が掲げているボール保持時の攻撃の質を上げていくというカタールワールドカップから得た日本の課題のヒントにもなるかもしれない。

また、国レベルではなくクラブチームのスカウティングという観点で言えば、こうした指標を見比べて各国リーグの特徴、それぞれの強みや弱みを解析し、自クラブのリーグでは希少価値の高いタイプの選手を、そのタイプの選手が過多になって市場価値が低く設定されているリーグから獲得できる可能性を探れるかもしれないし、その逆もまた然りである。選手たちがピッチに残っていたデータという副産物を手がかりにフィルターをかけながら逆算していくという手法は、選手のパフォーマンスを実際にピッチで見たり映像で見たりという旧来のスカウティング方法に比べると、効率的に選別していくという面ではより優位性があるだろう。

昨今、得られるデータの量は日に日に増え、同時にその精度も高まっている。戦術データやフィジカルデータはもちろんのこと、AIを活用した予測や分析もこの先増えていくことが予想される。しかし、データの量が増えれば増えるほど、その精度が上がれば上がるほど、読み解く側のリテラシーの難易度はさらに高くなっていくのは忘れてはならない。この先サッカーにおけるデータ分析というのは、計測可能な限られた情報の分析ではなく、得ようと思えば無限に得られる情報の分析である。「データが何を語ってくれるか」ではなく、「データから何が語りうるか何が語りえぬか、そして何を語るべきか」がより重要になってくるのではないだろうか。



J F A テクニカルハウス

座談会

「世界との差」は 可視化できるのか？

「世界との差」とは何なのだろうか？

日本代表の強化という側面で、そのテーマに向き合ってきたのがJFAのテクニカルハウスだ。

「データ」という指標を基準にしたA代表強化のプロセス、そして国立で間近に見た世界トップレベルに感じた「世界との差」を片桐氏、寺門氏、中下氏、越智氏の4名に議論してもらった。

取材・文 footballista編集部



片桐央視

Hiromi Katagiri

2010年入局。テクニカルスタッフとしてロンドン五輪、リオ五輪、ロシアワールドカップに帯同。2021年9月からの1年間はマッチアナリストとしてFCバイエルン・ミュンヘンに加わり、現在はU-17日本代表を担当している。



寺門大輔

Daisuke Terakado

1999年からヴェルディ川崎（現東京ヴェルディ）のスタッフを務め、2014年入局。世代別代表ではU-17からU-20、リオ五輪代表を歴任し、西野監督の就任と同時にA代表へ。現在も森保監督のもとで分析を任されている。



中下征樹

Masaki Nakashita

ジュビロ磐田、サンフレッチェ広島で分析コーチを担い、2019年に入局。東京五輪代表のテクニカルスタッフを寺門氏から引き継ぎ、その後はカタールワールドカップに出場したA代表に帯同し、現在に至る。



越智滋之

Shigeyuki Ochi

筑波大学の大学院時代からエリートプログラムやトレセンのスタッフとして活動。2020年に入局し、世代別代表ではU-22を担当。高円宮杯JFAU-18サッカープレミアリーグの大会レポート作成、指導者養成ではA級を任されている。

A代表が重視した2つの指標
「インテンシティ」と「コンパクトネス」

—— JFAテクニカルハウスとはどのような役割を持つ組織ですか？

片桐 「サッカーの技術面に関する様々な情報を収集・分析し、発信するための組織です。2002年日韓ワールドカップ開催を機に2001年に誕生しました。FIFAワールドカップや五輪、各カテゴリーの世界大会やU-18プレミアリーグ、クラブユースの高円宮杯など、国内外の大会を分析し、テクニカルレポートとして出す映像を作成するのも我々の担当です。JFAが技術面の情報発信を行う際の映像はすべて我々がサポートしています。そうした情報発信に加え重視しているのが日本サッカーのハブとしての機能です。現在9名のスタッフが各年代の代表チームにテクニカルスタッフとして帯同し、その中から得られた世界の頂点を目指すための示唆を、わかりやすい形で指導者養成そしてユース育成へと結びつけ、それぞれの活動もサポートすることで三位一体（+グラスルーツ）の強化策実現に寄与しています」

—— 今回は「世界との差を可視化する」というテーマでお話をうかがいます。まずはA代表での取り組みとして具体的な数値を用いて計

測しているという「インテンシティ」や「コンパクトネス」について聞かせてください。

寺門 「ベスト16という結果に終わった2018年ロシアワールドカップの後にA代表の監督に就任した森保監督が、重要テーマに掲げている『素早い攻守の切り替え』や『選手同士の距離感』を、データの裏づけとともに実現していくための指標が『インテンシティ』と『コンパクトネス』です。『インテンシティ』では、時速20km以上の高強度ランニングが10%に到達することを目標に置きます。一方の『コンパクトネス』は、ボール非保持時のゾーンディフェンスの面積を縦20m×横40.32m（ペナルティボックスの横幅）の806㎡にすることを基準としています」

—— それらを日本代表が追うべき指標として選んだ理由は何でしょう？

寺門 「2018年ロシアワールドカップのデータ分析から浮かび上がってきた日本の課題は2つあります。1つは60分以降の守備でのチャレンジ、いわゆる『デュエル』の勝率の低さでした。エリアとしては、ミドルサードのサイドとゴール前でのデュエル勝率の低さが際立っていました。このデータには空中戦の勝率も含まれています。ちょうどベスト16のベルギー戦でフェライニにやられたシーンをイメージしていただければわかりやすいですね。2-0でリードしていた日本が、後半にシャドリやフェ

ライニを投入してきたベルギーに逆転を許したゲームです。一般的には、ベルギーの戦術変更と選手交代によって日本が不利な状態に陥ったと認識されていると思います。しかし実際には、シャドリとフェライニが入る65分よりも前から、日本はボールロストの回数が増え、攻撃時のボール保持時のアクチュアルプレーイングタイムが極端に減少していました。パスミス回数も2.5倍に増えています。『なぜ、ベルギー戦の60分以降にあのような数値が出たのか？』という疑問から、最後の30分のデュエルの勝率を上げるという課題を持つことになりました」

——なるほど、ロシアワールドカップから地続きの課題だったわけですね。もう1つは？

寺門 「2つ目もロシアワールドカップのデータから浮かび上がった課題で、攻撃時のプレー時間を増やすことでした。森保監督が掲げる素早い攻守の切り替えを実現するために、デュエルの勝率を向上させること、そのために攻撃時のプレー時間を増やすこと。この両輪を組み合わせることを目標として設定しました」

——では、森保監督就任以降どのような経緯で「インテンシティ」や「コンパクトネス」という指標が導入されることになったのでしょうか？

寺門 「2020年の欧州遠征で対戦したカメルーンとコートジボワールとの2試合は1つのポイントでした。ロシアワールドカップの分析から、終盤でのデュエル勝率を高めなければならないという課題を持ちながらも、初戦のカメルーン戦(△0-0)では、75分以降からボール非保持時の高強度ランニングの割合がボール保持時の約2倍に達するというデータが出ました。わかりやすく言えば、守備で走らされたわけです。その結果、75分以降の走行距離で日本はカメルーンに大きな差をつけられました。続くコートジボワール戦(○1-0)は、多少戦術的な修正を加えたものの、75分以降の日本の走行距離の落差はカメルーン戦と変わりませんでした。

高強度ランニングを『いつ、どこで、どんな時に使うのか』を整理することが必要でした。森保監督が掲げる素早い攻守の切り替えにおいて、ボールを奪った後の攻撃で効果的にチームのパワーを最大化するために何をすべきか。あるいは、ボールを失った時に相手の攻撃を無効化するために必要なことは何か。これを考えた時に、選手同士の適切な距離感をベースにしたコンパクトネスが重要になってきます。我々は、『世界との差』を埋めるためにコンパクトネスを重要視しています。これは『世界は何mで日本は何m』という話ではなく、90分すべてで世界を上回ることはできないという前提に立って、『局面で世界を上回り、仕留めるためにどうすべきか』を考え抜いた末に行き着いたのがコンパクトネスという結論です」

——高強度ランニングの量だけを重視するのではなく、プレーエリアを整理することで後半の落ち込みを避けようという狙いですね。そのための指標が「コンパクトネス」であると。

寺門 「はい。どこでコンパクトにするのがベストなのか、コンパクトにした後にどんな振る舞いをすべきか、というテーマを持って戦いました。2021年9月のワールドカップ最終予選、ホームでオマーンに敗れた初戦(●0-1)はチームのコンパクトネスが失われ、ラインが低くなっていました。高強度ランニングの数値自体はそれほど落ちなかったものの、攻撃時の中盤エリアでの高強度ランニングが多く、相手のファイナルサードでの高強

度ランニングが少なかったというデータが出ました。コンパクトネスについても、守備時は自分たちのペナルティボックス付近の深いエリアに偏っており、攻撃面ではある程度ボールは支配しているものの、全体の位置情報としては相手のペナルティボックスから12mの位置で推移していました。つまり、相手に上手く守られているという状態ですね。

2021年10月のアウェイでのサウジアラビア戦(●1-0)でも、それと似たようなデータが出ました。この分析結果から、コンパクトにすることは大前提として、コンパクトネスを守備ではもっと前のエリアで、攻撃ではよりアタッキングサードのところで発揮しなければならないという認識が生まれました。高強度ランを發揮できる量は限られていますから、我々はデータを分析しながら、そのパワーを、いつ、どこで発揮すべきかを突き詰めていきました。その成果が出たのが、三笥薫の終盤の2得点でワールドカップ出場を決めた2022年3月のオーストラリア戦(○0-2)でした」

——基準となるデータを定めてチーム強化を行った効果が表れたわけですね。

寺門 「はい。この試合の日本のDFラインはかなりコンパクトになり、アタッキングサードでの高強度ランニングも増えていました。先ほど触れた最終予選序盤のオマーン戦やサウジアラビア戦と比べると、より前のエリアで高強度ランニングが繰り返されていたのです。その結果、75分以降の攻撃時のスプリントはオーストラリアと比較して300mの差を出せました。試合終盤に相手を仕留められるだけのパワーを使えたわけです。もちろん、試合展開、相手のストロングポイントやスタイルによっても表れるデータは変わってきますが、選手同士が近い距離にいて、守備面では相手を自分たちの意図するエリアに誘い込み、選手が前向きな状態でボールを奪取するために、縦20m×横40.32mというサイズは有効だと考えています」

4年間の流れの先にあった「番狂わせ」 2026年北米ワールドカップへの新たな課題

——ドイツやスペインと対戦したFIFAワールドカップ カタール2022では「インテンシティ」「コンパクトネス」という指標から、どのようなゲームプランを立てていたのでしょうか？

寺門 「ドイツ、スペインの攻守の切り替えの速さ、とりわけネガティブトランジションの厳しさは強烈なものがあります。対戦が決まった時は、チームをよりコンパクトにして、ボールを奪った瞬間に、誰がどこにいるのかをイメージできる状態を作ることを目指しました。ドイツ戦(○2-1)、スペイン戦(○2-1)ともに、相手のゴールを見据えてボールを奪い、前向きな状態から出ていくイメージを持ち続けながら、日本は後半の勝負どころで10対10のフルコートマンツーマンを仕掛けました。

日本の選手たちが、1対1のデュエルで上回れるという公算は、前年からの欧州選手の分析の中で森保監督とすべてのコーチングスタッフが持っており、あのスタイルを取れるという確信もありました。大事なことはそのスタイルをいつ、どこで出すかです。ドイツやスペインを相手に、コンパクトネスを維持しながら強度を落とさず、タイミングを見計らってあのスタイルで仕留められたのは、90分をトータルで見た森保監督の戦略によるものだと考えています」

——「コンパクトネス」自体が「ハイプレスの運用」を目的にした指標ですし、ドイツ戦やスペイン戦での後半のギアチェンジ戦術もその流れで考えれば、長い準備の末に勝ち取った成果と言えますね。ちなみに、ロシアワールドカップでの課題であった60分以降のデュエル勝率低下は、カタールワールドカップで改善されましたか？

寺門 「デュエルの勝率自体は上がりましたが、まだ75分以降の勝率は下がり幅こそ小さくなったものの下がっていました。優勝したアルゼンチンのような強豪国は終盤でデュエルの勝率を上げています。そこが日本にまだ足りない部分であり、世界との差ではないでしょうか」

——2026年の北米ワールドカップに向けて重視していくことは何でしょうか？

寺門 「ロシアワールドカップの後にも出ましたが、ボールを保持して試合をコントロールできる時間を増やしていくという点です。スペイン戦では2：8、ドイツ戦では3：7の支配率で相手にボールを握られる時間が多くなりました。スプリントやトラッキングのデータを見ると、日本の走行距離やスプリント数はかなり多くなっていましたが、特に前線の選手が守備に追われる割合が高かったですね。そのスプリントを攻撃で使えるようにするために、ボールを握りながらより相手のゴールに素早く近づく方法、ゴール前の脅威を保ちながらそこにボールを届ける方法を模索している最中です」

——「インテンシティ」と「コンパクトネス」という指標は今後も用いていくんですよね？

寺門 「今までの流れがあるので、それは引き続き見ていければと思います」

中下 「このチームが『勝ち筋を見出せる良い状態は806m程度』という感覚をスタイルとして共有していることは間違いありません。でも、もっと大切なことは、それが例えば1000mに広がって間延びしたような状況になったとしても、個々の力で上回って勝つことです。積極的にゴールに向かう、ゴールに戻るといった個々のハイレベルな日常を繰り返していくことが大切だと思います」

片桐 「日本では守備時はコンパクトにサッカーをすることが重要だという認識が広がりましたが、これからは状況ごとに見ていく必要があります。例えば、海外の強豪クラブはそれほどコンパクトではない場合も多く、それは一人ひとりの守備範囲の広さと関係しているのかもしれませんが。1人の選手の守備範囲はフィジカルの能力や予測力など様々な要素によりますが、これまで縦20～25mを基準としていたコンパクトネスを30mに広げて勝てるような日本のチームが出てくれば、日本サッカーはもっと強くなるのではないのでしょうか。コンパクトに戦う強みを持ちながら、たとえ間合いが広がっても勝てるようになった時には、また違った日本サッカーの姿が見られるはずです」



ワンタッチによるレイオフ、GK+1 ビルドアップのディテールに違い

——そうした日本サッカーの流れを踏まえた上で、横浜F・マリノス対マンチェスター・シティ、FCバイエルン・ミュンヘン対マンチェスター・シティ、川崎フロンターレ対FCバイエルン・ミュンヘンの3試合を見た感想を伺ってもいいでしょうか？

片桐 「まず感じたのが先ほど少し触れましたが、シティやバイエルンはそれほどコンパクトではないということです」

中下 「先ほど片桐が個々の守備範囲について語っていましたが、そのテーマで言うとシティのCBが前に上がって、後ろで3対3とか、FWと1対1というリスクのある状況を作っても前から奪いに行く、というやり方が印象的でした。個々の能力が高い選手たちだからできるやり方なのかもしれませんが、『1人で守れる』という自信があるから、CBを前に上げるという発想に繋がっているようにも感じます」

越智 「あとは個々の状況判断ですね。例えば、シティのアンカーを務めるロドリが前に行った時にプレッシングで踏み止まったシーンがありました。無駄に行き過ぎない判断力も、間延びしがちな後半の最後の時間帯で『行く・行かない』を効率的に行えることに繋がっているように思いました。逆に横浜FMは、ボランチが相手のスライドに全部ついて行って、間に合わないところを突かれて失点しました。90分のどこで仕留めるのかという勝負所を見極める目は大事になってくると思います」

——「コンパクトネス」はプレーエリアを圧縮することで運動量を効率化する試みですが、個々の判断でさらに効率化できるということですよ。

片桐 「この3試合でも戦術面はもちろんですが、欧州のトップ選手たちの判断の速さや予測、プレーの質といった個々の力を見せつけられた部分はありました。チーム戦術を成し遂げるためには個人の質の高さが重要です。そこに対しても両軸でフォーカスしていく必要があります」

——横浜FMとシティは大枠としては似たサッカーをやっています。前

からマンツーマン気味にハメに行くプレッシング、ビルドアップでも簡単にロングボールに逃げずに丁寧に繋ぎます。ただその中で違いを挙げると、シティの場合はビルドアップの局面でさらにGKがDFラインの高さにまで上がっていました。

越智 「GK+1の作り方でいうと、横浜FMよりもシティの方がGK+1をより生かしたパスの動かし方をしていましたね。ビルドアップで印象的だったのは、ワンタッチパスでの落としのパスの精度です。シティの選手はGKに強いプレッシャーがかかる場面では、その次にフリーになる選手に対してヘルプに入る3人目の選手は、必ず相手を背負った状態でボールを受けていました。その3人目の選手に対して入れるレイオフと呼ばれる縦パスと、ワンタッチの落としのパスの精度が非常に高かったです」

片桐 「バイエルンに関しても同じ印象を持ちました。ワンタッチに関するデータとしては、川崎Fとバイエルンの2チームはそれほど大きく変わりませんでした。しかし、バイエルンのワンタッチ、特にビルドアップでのワンタッチが上手いことは私も感じましたね。川崎Fも前線にボールが入った時や、攻撃に入った時のコンビネーションでのワンタッチは多く出てきますが、ビルドアップでのワンタッチ、中盤にボールを当てて相手を食いつかせてから落として展開させるような出し入れのワンタッチは、海外で多く見られる一方、育成年代も含めて日本ではほとんど見られません。組み立てのところで、あのように質の高いワンタッチパスをさせてしまえば、川崎Fクラスのチームでもボールを奪うのは難しいですね」

——マンツーマンのハイプレスがこれだけ主流になってくれば、ビルドアップの局面で1人の選手に与えられる時間はますます短くなりますからね。

片桐 「川崎Fはビルドアップの局面でコントロールしてからパスを出すことが多かったですね。一方のバイエルンはワンタッチが多く、止める場合でも蹴るまでのスピードが速い。その差が、ハイプレスの成功率の差に表れたように見えました」

——攻撃面に関してはどうですか？

中下 「データを見てもハーランドの裏抜けの回数が非常に多かったですね。後半の45分だけで21回の裏抜けを実行していました。今季のJリーグ最多は29回なので、後半だけでその数字に迫っている。質、量ともに多く、とても印象に残りました」

越智 「ハーランドは後半のみの出場でしたが、プレーの連続が多いです。単純な裏抜けだけではなく、毎回毎回DFラインの背後だけではなく、『受けに行く→落とす→もう一回背後へ』というように、常にプレーを繰り返していました。この連続性の高いプレーに相手CBはついていけてないと感じました。クロスに対しても、ニアだけではなくファーでCBの死角へと動き直すアクションを取り続けていました。こうしたオフ・ザ・ボールでのアクションの連続性は裏抜けの21回という数字にも表れているのかもしれないですね」

片桐 「ハーランドと対峙したDFは、絶対に頭が疲れたと思うんです。気を抜いたら裏を取られるので、一歩二歩後ろにポジションを取らざるを得ない。オフサイドポジションにいてもパスが出る瞬間にオンサイドのポジションを取るような抜け目なさや連続性が、対峙するDFの脅威になっていました」

——キックやシュート、止める・蹴るのような技術面についてはどう見ましたか？

片桐 「一発で仕留めるためのコントロールの部分は、まだまだ日本

選手と差があると感じました。海外の選手は、相手を背負った状態やプレッシャーがかかった状態でも、いい位置にスパッとボールを置くことができ、次のプレーへの動作の無駄がありません。以前、私たちが分析して報告してきた日本のパススピードの遅さについては、近年大きな改善が見られています。その上で、トップレベルの選手の前線の動き、動き直し、連続性、個々の技術の高さの部分は、まだまだ足りない。今回の3試合で個々の選手の質の高さを間近に見ることができたことは有意義でした」

寺門 「カタルワールドカップが終わった後、吉田麻也が『ブスケツ（スペイン代表）は、ここにパスを出されたら嫌だなんて思うところを常に見ていて、それをケアしなければならぬ。身体的にも心理的にもすごく消耗した』と言っていました。ハーランドのプレーの連続性の話もそうですが、シティはパスの出し手も常にそこを見ながら、隙あらば相手の嫌なところを突くということチーム全体が共有しています。実際にフィジカルデータで見えていない部分も含めた意識の差が、横浜FMとシティの違いかもしれません」

——逆に、横浜FMや川崎Fが通用した部分はどこにありましたか？

寺門 「横浜FMは善戦しましたし、シティが厳しいマンツーマンプレスを行った中で、そこを剥がしてゴールに向かう姿勢を見せました。局面でしっかり向かう意思を持っていれば、ボールを奪えたり、ゴールに向かう姿勢も見えました。川崎Fも強度の高いバイエルンの守備に対して、前もって準備をして個人で外す、チームとして相手を外すことができていました。その意味では、日本人も自分たちのやるべきことをはっきりとさせていけば、世界レベルの強度の相手に対しても、判断速くアジャストできるし、相手を上回れるものを持っていることを再認識できました。こうした強度の高い相手と戦うことで、Jリーガーの能力が引き出されることには大きな可能性を感じました。Jリーグのクラブに求めていくことも大切ですが、育成のカテゴリーで高い強度でのプレーの大切さを伝えていくことが大事になると思います」

これから突き詰めていくべきは 「意思を持った技術」

——シティ、バイエルンという世界のトップクラブを見た上で、あらためて世界と日本の差はどこにあるのでしょうか？それを可視化する方法、その差を縮めていくためのアプローチについて、みなさんの意見を聞かせてください。

片桐 「今のシティは、様々な戦術を生み出す世界でも類を見ないチームですが、その戦術を可能にするのは個人の戦術能力と技術の高さです。選手の能力が高ければ高いほど、多くの戦術を実行できますから、ハイレベルな戦術に加えて個人の違いとは何かということを多くの人が感じたと思います。

育成年代で海外遠征に行くと、最初は相手にぶつかれなかった選手が、最後にはぶつかって勝ってくるというケースが少なくありません。しかし、その基準を持って帰国すると、日本にはそのような基準のインテンシティがないために元に戻ってしまう、ということを繰り返すことになってきます。日本人の能力は間違いなく高いですし、今回の試合でも海外のトップクラブ相手に十分に魅力的なサッカーができた。個々の選手の技術の

高さや個人戦術がマッチして、意思を持ってプレーした時には、相手を上回ることができることを示したわけです。これからは国内でもそういった機会をどんどん増やし、それを育成からやっていくことが大切でしょう。ワールドカップという世界を決める大会を通じて掲げた基準を育成から発信して、みんなで作っていくこと。それがこれからの日本サッカーのために必要です。多くの選手、指導者が世界に目を向けてやっていますから、我々は彼らに役立つデータを発信していきたいと考えています」

寺門 「意思を持った技術」という意味では、今の世界と日本の違いは相手にいかに脅威を与えられるかだと考えています。攻撃では先ほどのハーランドのように、危険なエリアに入るアクションを起こして相手を嫌がらせる、怖がらせるということを繰り返す必要があります。個人でもグループでも、相手に脅威を与える攻撃の回数を増やすことが大事だと思います。逆に守備面でも、個人としてグループとして、相手の脅威を削ぎ続けることが大切です。自分の中のキーワードは脅威を与えられるか、削ぎ取れるか、というところをテーマにして代表をサポートできればと思います」

——「意思を持った技術」の「意思」というのは何を指しますか？

寺門 「単純にボールを奪うのではなく、奪った先に何を見るかです。どこに矢印を引くかが大事で、奪った先でどのように攻撃を仕掛けるか、どういうふうな奪い方をしてどこへ走るのが一番いいのか。単純に目の前の局面だけではなく、その先に繋げるためにどうボールを受けるか、守備をしているところからどうやってゴールを奪うのかをイメージしながら守備をするか。そうした目的を持ったプレーをする意思です」

中下 「実際、それができているシーンもあったと思います。シティ戦では横浜FMが2-0で上回っている時間帯がありました。それは相手のフィジカルが上がり切っていない時期だからこそ起きたことかもしれませんが、横浜FMがそのまま勝利する可能性もあった試合でした。世界相手にも上回っていた部分、強みとして出ている部分にも光を当てて、Jリーグも日本代表も伸ばしていけたらいいですね。アンデルソン ロベスの先制ゴールの前にボールを奪ったシーン、松原健がゴールを決めた2点目などは、グリーリッシュが守備をサボったことが要因とはいえず、あのようなスプリントで大きな脅威を与えられた点は良かったのではないのでしょうか」

越智 「私も可視化という部分では、松原の得点は今後の強化を見ていく上でいいシーンだったと感じています。本人も試合後のコメントで『グリーリッシュ選手がついてこないと思ったので』と話していましたが、寺門が言っていた奪った先を意識した守備、次に起こることを意識したアクションは、世界と戦っていく上でとても重要です。45分、90分の中で日本が上回ることができる部分をどのように可視化するか。これは、我々に課された課題でもあります。私がテクニカルスタッフとして帯同しているU-22代表の大岩剛監督は、『シームレス』というキーワードを掲げています。それは奪った先を意識した守備や、奪われることを予測したポジショニング、これまで4局面と言われていた部分を分けて考えるのではなく、その繋がりを意識して頭も体も戦術的にも技術的にも90分やり続ける。今回の3試合を見て、選手たちが100%、90分間やり続けられるようなアプローチをサポートしていくことの重要性をあらためて感じました」



J.LEAGUE TECHNICAL REPORT 2023 SUMMER から見えた 「世界との差」10の視点

今回のレポートから見えてきた「世界との差」とは、結局何なのか？
データ分析や選手コメント、JFAテクニカルハウスの見解をまとめてみたい。

視点 1 走行距離に表れない「動きの質」の追求

1

単純な走行距離だけでなく、裏抜けなどのオフensivaクションやポジションを取り直す動きなど、サッカーに必要なオフ・ザ・ボールの動きを計測・向上させる必要がある。

☞ 詳細はP10「横浜F・マリノス対マンチェスター・シティ PHYSICAL ANALYSIS」参照

視点 2 CBのロングフィードの重要性

2

マンチェスター・シティのデータで顕著だったのはバイパス数（相手選手を「飛ばす」パス）の多さ。中でもCBの数値が極めて高く、後方からのロングフィードの重要性を物語っている。

☞ 詳細はP14「横浜F・マリノス対マンチェスター・シティ TACTICAL ANALYSIS」参照

視点 3 「減速力・停止力・方向転換力」の不足

3

ミドルサード、アタッキングサードでの直近相手選手距離の比較で1m以上詰め切れていない、裏抜け時のトップスピードの差と方向転換角度が浅い原因として上記の仮説が考えられる。

☞ 詳細はP24「川崎フロンターレ対FCバイエルン・ミュンヘン PHYSICAL ANALYSIS」参照

視点 4 マンツーマンとゾーンの使い分け

4

人へのプレッシャーを高めるマンツーマンとスペースを守るゾーンという優先順位が異なる守り方を使い分ける際、両者の境目を意識したチームとしての意思決定が必要になる。

☞ 詳細はP28「川崎フロンターレ対FCバイエルン・ミュンヘン TACTICAL ANALYSIS」参照

視点 5 中盤、DFの運ぶドリブルの必要性

5

「シティの選手はパスが上手いイメージが強いかもしれませんが、僕は要所要所での中盤の選手、DFの選手の運ぶドリブルが嫌でした」（渡辺 皓太）

☞ 詳細はP13「COMMENT of YOKOHAMA F.MARINOS #1」参照

視点 6 2つのパスコースを消すプレスの駆け引き

6

「自分が受けたシティのプレスで違いを感じたのは駆け引きの上手さ。自分がボールを持った時にもボランチを消しつつ、CBに行けるポジションを取ってきました」（一森 純）

☞ 詳細はP17「COMMENT of YOKOHAMA F.MARINOS #2」参照

視点 7 個々の剥がす能力や打開する能力

7

「カウンターの迫力、スピード感はあらためて違うなど。ボールを持ったら何かする。それを一人ひとりが持っている。その中であのボール回しがあれば、それは強い」（宮代 大聖）

☞ 詳細はP27「COMMENT of KAWASAKI FRONTALE #1」参照

視点 8 プレスを回避する立ち位置

8

「奪いに行きにくい、嫌な場所にみんなが立ってました。自分の後ろにいるシャドーの選手もすごく嫌な位置に立っていたので、なかなか前に奪いに行けなくなりました」（橋田 健人）

☞ 詳細はP31「COMMENT of KAWASAKI FRONTALE #2」参照

視点 9 ビルドアップ局面でのレイオフを磨く

9

マンツーマンのハイプレス対策として、相手を背負っている味方に縦パスを入れてワンタッチでサポートに来た3人目の選手に落とすパス（＝レイオフ）が、日本サッカーは明らかに少ない。

☞ 詳細はP42「JFAテクニカルハウス座談会」参照

視点 10 「意思を持った技術」を突き詰める

10

目の前の局面だけでなく、ボールを奪った先でどう攻めるのか、逆に奪われた後にどう守るのか。目的を持ったプレーとそれを実現させるために必要な技術のつながりを意識する。

☞ 詳細はP42「JFAテクニカルハウス座談会」参照



J.LEAGUE

**J.LEAGUE
TECHNICAL
REPORT
2023 SUMMER**